

アナーキストの未来社会論争—1884年～1886年—
—自由社会論をめぐる—

田 中 ひかる

目 次

| | |
|---------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 1 共産主義的アナーキズムの成立 | |
| (1) 集産主義と共産主義 | 2 |
| (2) ジュラ連合の決議 | 5 |
| (3) ドイツ語圏のアナーキズム運動 | 7 |
| 2 自由社会論の成立とその背景 | |
| (1) アナーキズム路線の採択 | 10 |
| (2) 社会民主主義者に対する反論 | 16 |
| (3) 個人主義的アナーキストとの論争 | 21 |
| 3 共産主義者との論争 | |
| (1) ポイケルトによる批判 | 24 |
| (2) リンケの批判とモストの反論 | 27 |
| (3) 労働を義務とする根拠 | 29 |
| (4) 未来社会像を描く目的 | 31 |
| おわりに | 34 |

はじめに

「アナキー」という語に、支配や政府のない自由な社会状態といった肯定的な意味が与えられるようになったのは、19世紀後半のヨーロッパにおいてであったが、1880年代以降になると、「アナキスト」と名乗り、自身の理念を「アナキズム」と呼ぶ人々が、ヨーロッパを中心に多数出現する。その際彼らの多くは、「アナキー」を国家なき社会の状態と特徴づけ、これに関するユートピアを描き、さらにその実現のために様々な活動を展開した。こういったアナキストたちの思想や運動に見られる多様性や共通性、あるいはその包括的な見取り図は、今日まで行われてきた様々な研究によって明らかにされてきた[8]⁽¹⁾。ただしそういった研究においても、いかなる状況のもと、どのような目的で、アナキストたちが彼らの理想とする未来社会像を描いたかという問題についての検討は、依然として不十分であるように思われる。だがこのような問題の解明は、19世紀末以降のヨーロッパやアメリカにおいて、アナキズムが少なからぬ支持を得たのがなぜかを考察する上で有益な基礎作業となるであろう⁽²⁾。

そこで筆者は本稿で、ドイツ語週刊紙『フライハイ特 *Freiheit*』（自由）紙上で展開された自由社会論の形成過程と、そこで描かれた未来社会像をめぐる様々な議論を検討する。同紙は、イギリス、スイス、アメリカ合衆国と、その発行地を転々と変えながらも、30年以上にわたって発行され続け、ヨーロッパのドイツ語圏とアメリカにおけるドイツ系移民労働者の中で支持を得た、アナキズム史上極めて重要な新聞である。当初同紙は、社会主義者鎮圧法の下で活動するドイツ国内の社会民主主義派の機関紙として、1879年にロンドンで創刊される。その主体となったのは、元ドイツ帝国議会議員の社会民主主義者ヨハン・モスト（15頁を参照）と、ロンドン在住のドイツ出身の労働者による組織である共産主義労働者教育協会（以下「協会」と略称）であった。だが創刊の数ヶ月後には、『フライハイ特』派はドイツ社会主義労働者党の「指導者」派と「戦術」をめぐる対立する。やがて『フライハイ特』派は「社会革命」路線を打ち出すが、さらに82年10月終わりには、自身がアナキズム派に属することを明らかにした[23]。ただしこの時点では、同紙上でアナキズム社会の構想が詳細に描かれていたわけではなかった。だがそれから1年あまりが経過した84年の前半には、同紙上で「自由社会」に関する一連の論説が掲載され、さらに同年7月、それらがまとめられてパンフレット『自由社会』として刊行される。

同書の著者はモストであったが、彼についてはこれまで、優れたプロパガンディストであったが思想家としては凡庸だった、といった評価が定まっているようである[5, p.270; 8, p.416]⁽³⁾。そのためか、『自由社会』の内容が紹介されることはあったが[20, pp.154ff.]、それに関する分析は、筆者の知る限りではこれまで皆無である。しかし、アナキスト自身がアナキズムについて論じた単行本で、しかもドイツ語で書かれたものは、84年当時は極めてわずかであったと考えられる。それゆえ、その内容がいかに凡庸のものであったとはいえ、同書は検討に値する書物

であると筆者は考える。

他方、同書を含めて、『フライハイ』紙上で展開された様々な主張に関する検討は、これまでほとんどなされていない。たしかに、ドイツ史上のアナーキズム、あるいはアナルコ・サンディカリズムに関する研究は、ここ30年あまりの間に蓄積されてきた⁽⁴⁾。だが、ドイツに「社会主義的アナーキズム」は存在しなかったという見解は、ドイツ近代史に関するごく最近の叙述においても示されている⁽⁵⁾。そこに反映されているのは、アナーキズム研究がいまだドイツ史の全般的な叙述に還元されることのない分野に過ぎないという現状であろう。他方でこれは、帝政ドイツ時代のアナーキズムに関する研究が、ワイマール時代のアナルコ・サンディカリズムに関する研究に比べ、いまだ不十分であるためなのかもしれない。いずれにせよ、以上のような研究状況から考えれば、『フライハイ』紙に関する研究は、アナーキズム史とドイツ史における空白を埋めるという意味でも重要なのである。

以上のような理由から、筆者は本稿で『フライハイ』紙上で展開された自由社会論を検討するが、ただしその目的は、『自由社会』で示された未来社会像を詳細に分析、もしくは再構成することではなく、モストラ『フライハイ』派が自由社会論を展開した際に見られた、彼らの論理や意図を明らかにすることにある。そこから、いかなる状況のもとで、どのような論理に基づいて、何を目的として、彼らが未来社会像を描いたのか、といった点を明らかにできるであろう。ただし、自由社会論をめぐる議論の背景を知るために、まず第1章では、1880年代以降に大きな影響力を持つようになる「共産主義的アナーキズム」の成立について概観する。次いで第2章では、パンフレット『自由社会』の成立過程とその背景について、第3章では、これを批判したアナーキストに対するモストラ『フライハイ』派の反論を検討し、自由社会論に込められた彼らの意図を明らかにする。

1 共産主義的アナーキズムの成立

(1) 集産主義と共産主義

周知のように、いわゆる第一インターナショナルが1872年のハーグ大会で分裂した後に、バクーニン派あるいは反権威派は独自の運動を展開するが[14, pp.206-82; 27, pp.310-20]、特に、スイスのジュラ、スペイン、イタリアの各連合のメンバーの中から、国家なき理想社会の状態を「アナーキー」と特徴づけ、自身を「アナーキスト」と呼び、さらに自らの主張を「アナーキズム」と呼ぶ人々が現われる。ただし、先行研究の指摘によれば、彼らの大多数が「アナーキスト」と名乗るようになるのは、70年代終わりからのことであった[2, p.38ff.].その後1880年代に入ると、まずジュラ連合が、ロシア出身のP・クロボトキンの提案に基づいて「アナーキスト共産主義 *communisme anarchiste*」を運動の目指す最終目標であると決議し、やがてヨーロッパ各

地でもこれに賛同する人々が現われる。

ただし本稿で筆者は、そういった主張を便宜上、さらにアナーキズム史家のM・ネットラウが用いている語であるという理由で、「共産主義的アナーキズム *kommunistischer Anarchismus*」、これを支持する人々を「共産主義者」と呼ぶことにする。彼らの主張の特徴は、未来社会における原理を、「各人はその能力に応じて働き、その欲求に応じて消費する」と定めている点にある。ネットラウによれば、1880年代以降、共産主義はヨーロッパのアナキストたちの間で「教義」にまでなり、アナキスト同士が理論をめぐって対立するという「悲劇」をもたらすことになる[15, pp.5ff.].ただし、共産主義的アナーキズムが成立する以前に反権威派において有力な理論だったのは、「集産主義 *collectivisme*」であった。以下では、この理論が主張され始めた経緯を簡単に見た後に、共産主義的アナーキズムの成立過程を見る。

1868年9月、M・バクーニンは、ベルンで開催された平和自由連盟の大会の席上、要約すれば以下のように主張した。——「共産主義 *communisme*」では社会の諸力と富が国家に集中するが、自分は国家の廃止を要求するため、何らかの権威によって上からでなく、「自由なアソシエーション」によって下から上へと組織される社会および共同所有を望む。この意味で自分は「集産主義者 *collectiviste*」である、と[2, p.36]⁽⁶⁾。つまりここでは、「共産主義者」の目標が国家による富や権力の独占とされ、他方「自由なアソシエーション」が富を共有する「下から上へ」組織された社会を目指すのが「集産主義者」とされていた。このような意味で「集産主義者」という語が最初に用いられたのがいつ頃なのかは定かではないが、ネットラウは次のように推測している。おそらく60年代の終わり頃には、いくつかの地域で様々な人々が「集産主義者」と名乗るようになり、そのうちの一人がバクーニンであった。他方、当時「共産主義者」という語は、「権威主義的」な社会主義をイメージさせるものであり、しかもあらゆる社会主義者に投げつけられる蔑称としても用いられていた。したがって、「集産主義者」という語は「権威主義的」社会主義に反感を持っていた人々によって支持されることになり、特にジュラやベルギーの社会主義者たちの間で最初にこの言葉が広く用いられ始めた、と[14, pp.101ff.].つまり、集産主義と共産主義は、後になされたように、生産物を分配する方法という観点からではなく、未来社会の組織論というレベルで区別されたようである。

だがその後、未来社会における生産と消費に関して、反権威派の間で様々な見解が表明されていく。74年にはジュラ連合のJ・ギヨームが、イタリア人向けに未来社会構想を起草し、これをイタリア連合のメンバーC・カフィエロが翻訳すると、その手稿がイタリア人たちの間で回覧された。そこでは「能力に応じて働き、欲求に応じて消費する」という経済システムが最終目標に定められ、それに至る「過渡期」においては、それぞれの組織がそれぞれの状況にみあった経済システムを採用する、とされていた。したがって、共産主義という語が用いられなかったものの、実質的には、後に主張される共産主義を究極目標とする見解が、ジュラ連合の中心人物によってこの時期に示され、イタリア人たちの間に知られることになった。他方この文書は、いくつかの

変更を加えられて、76年にフランス語のパンフレットとして刊行されるが、ネットラウによれば、ジュラの人々にとってはそこで展開されていた思想は特に目新しいものではなかったという[2, p.39; 14, pp.219ff.]。

ここで注目しておきたいのは、「過渡期」において多様な選択肢がある、という上述のギヨームの見解である。ジュラ連合におけるもう一人の中心メンバーA・シュヴィッツゲーベルも、75年に次のような見解を示していた。——革命は地域ごとで異なり、さらに革命後には様々な社会主義システムが並存するであろう。ドイツでは「労働者国家」が、イタリアとスペインでは「自治体の連合」が実現され、さらにフランスのある自治体では私的所有が維持され、他の自治体では集団所有が浸透する、ということもありうる。だがこういった事態は、革命の支障とならない。なぜなら彼らの最大の関心事が、革命の勝利だからである、と[14, pp.217-19]⁽⁷⁾。たしかにこの時にシュヴィッツゲーベルは、「自治体の連合」が最も望ましい経済システムだと結論づけてはいるが、それでも彼やギヨームの見解は、70年代のジュラ連合においては、革命直後の社会において様々な社会が共存することを容認する人々がいたことを明らかにしている。

ところが、各人がその「欲求に応じて」消費することを、未来社会における唯一の原則とすべきだという見解が徐々に現われてくる。その端緒を成したのは、ジュネーヴで活動していた「ラヴニール *L'Avnir*」(未来)グループによって刊行された一冊のパンフレットであった。同書は、76年初頭にリヨンの手工業職人を対象として刊行され、その中で著者のF・デュマルトレーは、来るべき選挙で棄権せよと呼びかけると同時に、目指すべきは社会革命を通じて実現される「アナキスト共産主義 *communisme anarchiste*」だと述べていた。その際この理念の詳細は明らかにされていなかったが、「各人はその能力に応じて、各人はその欲求に応じて」というスローガンが掲げられていたことから⁽⁸⁾、これが後に広く主張される共産主義的アナキズムと同じ理念であることは明らかである。ネットラウによれば、このパンフレットは当時、スイス出身の社会主義者や、スイス各地に在住するパリ・コミューンの亡命者たちの間で知られるようになり、また、彼らの間で共産主義に関する討論が、公開の場でなされたと思われるが、その際には、共産主義的アナキズムへの支持を公然と表明するE・ルクリュのような人物まで現われたという[14, pp.228ff.]。

もちろん、先述した文書においてギヨームは、現物もしくは「労働券」によって「完全な労働収益」を各労働者が得るが、さらに生産力が増大して余剰が出るようになれば、各人の「欲求に応じて」消費する社会が実現されると述べ、共産主義を肯定的に評価していた[14, p.220]。だが当時、スイスの反権威派において、旧来の意味での集産主義者は多数派であったであろうし、彼らにとって共産主義とは、バクーニンが表現したように、まずもって権力と富が国家に集中する体制を意味していたであろう。したがって、それとは異なるものとして、共産主義を肯定的に評価するルクリュのような人物は、まだ当時は例外的だったはずである。

ところが、76年10月にイタリアで開かれた秘密会合の場で、反権威派のイタリア連合は、これ

まで主張されてきた「労働手段の共有」に加えて「労働収益の共有」を支持することを決議した [13, p.233]⁽⁹⁾。この時には共産主義という語が用いられなかったが、その後78年8月に開催されたジュラ連合の会議でP・ブルースは、将来の社会が共産主義に基づき、そこでは「各人の欲求に応じて」消費がなされると述べている [2, pp.47ff.; 14, pp.276ff.]。さらにその直後、ベルギーのヴェルヴィエにおいて反権威派による最後の国際会議が開催されたが、その席上、集産主義を支持するスペイン連合のG・ビニャスらと、共産主義を支持するイタリア連合のA・コスタらの間で論争が起きている。ただしこの時には、原理に関する決議はなされていないようである [15, pp.7-9]。だがその後、共産主義はジュラ連合によって、支持されるべき原理として採択されるに至る。その経緯を以下で見る。

(2) ジュラ連合の決議

78年頃からジュラにおける反権威派の運動は衰退していくが、それを象徴していたのは、連合の機関紙『ジュラ連合会報 *Bulletin de la Fédération jurassienne de l'Association internationale des travailleurs*』が、78年3月に、定期購読者の激減を理由に発行を停止したことであろう。その後ギヨームやジュラの時計工たちに代わって運動の中心となるのは、ブルースやクロポトキンら亡命者たちであった。ただし、同紙を引き継いだ『アヴァン・ガルド *Avant-Garde*』(前衛)紙は、ドイツ皇帝暗殺未遂事件を論じた記事を理由に、78年12月にスイス政府の決定に従って発行停止処分を受け、編集者であることを理由に逮捕されたブルースは、翌年6月にスイスを追放される [14, pp.272, 276, 280-3; 21, pp.126-133]。

追放される以前、ブルースはクロポトキンとともに新たな機関紙の創刊を計画し [14, p.284; 15, p.64; 21, p.132ff.]、その結果、79年2月からジュネーヴで『レヴォルテ *Le Révolté*』(反逆者)紙が刊行を開始する。同紙に掲載された記事のほとんどを執筆したのはクロポトキンであったが、その運営スタッフに、かつて「ラヴニール」グループに属したデュマルトレーのような人物も含まれていたという事実は重要である。彼らはクロポトキンとの親密な関係の中で、彼に影響を与えたと考えられるからである [14, pp.234ff. (Anm. 243), 285]⁽¹⁰⁾。

79年10月、『レヴォルテ』紙は、クロポトキンがジュラ連合の会議で、「集産主義を過渡期として、共産主義的アナーキズムを最終目標とする」と発言したことを報じた⁽¹¹⁾。また彼は、同じ会議での報告で、まずヨーロッパで近い将来に革命が勃発するという予測、および革命の過程に関するヴィジョンを明らかにし、さらに、権力が解体されて富が収用された後、社会を組織する主体が「集産主義者のコミューン」であると述べた [14, pp.289-93]⁽¹²⁾。だが、その後クロポトキンは、ジュネーヴで『レヴォルテ』のスタッフと議論を重ね、あるいはE・ルクリュと文通しながら、ジュラ連合が共産主義的アナーキズムを支持する必要があるという結論に達したと考えられる。さらにクロポトキンは、連合の会議で自分を支持するように、とルクリュとカフィエロに

要請する。先述したように、前者は当時共産主義への支持を公然と表明していた人物であり、後者はギヨームから未来社会構想を学び、また上述したイタリア連合の決議を採択した会合に参加していた人物であった[2, p.51ff.; 15, pp.12ff.]。

したがって、クロボトキンが共産主義を主張し始める要因として、まず考慮に入れておかねばならないのは、それ以前から共産主義を主張していた人々からの影響であろう。ただし、アナーキストの理論が不明確であり、明確な理論を確立しなければならないといった批判について、当時クロボトキンが言及していたという事実も重要であろう。なぜなら、こういった批判を強く意識して、アナーキズムの理論を明確にする必要があると考えるようになったために、共産主義を唯一の原理にせよとクロボトキンが要求するに至ったという可能性も否定できないからである[2, p.51]⁽¹³⁾。

こうして80年10月、ジュラ連合の会議の席上、クロボトキンは共産主義をジュラ連合が支持すべきだと主張する[2, pp.52-8; 14, pp.305-9]⁽¹⁴⁾。この提案は、クルトラリー支部が大会に提出した綱領草案を批判する形でなされた。この草案では、「共産主義国家」が批判され、新たな社会において土地・生産手段・原材料を共有化する集産主義が採用されるべきであると述べられていた⁽¹⁵⁾。これに対するクロボトキンの見解を要約すれば、ほぼ以下ようになる。——これまで我々が集産主義という語を用いてきたのは、共産主義という語が「修道院」や「兵舎」のような制度として理解されてきたからである。他方で我々は、「社会資本」を共有財産にする一方、「労働収益」を分配する方法が、諸グループの自由に任されるシステムとして集産主義を理解してきた。だが今日、集産主義という語は、「政治革命」を優先して「社会革命」を先送りにしようとする「進化論者たち les évolutionnistes」が、生産手段等を共有化しながら生産物を個人ごとに分配するシステム、という意味で用いている。だから我々は、集産主義ではなく「アナーキスト共産主義 communisme-anarchiste」という名称を採用すべきだ、と。

以上で述べられている「進化論者」とは、当時フランスで「最小限綱領」への支持を呼びかけていた社会主義者 J・ゲードらだった可能性が高い。というのもこの綱領では、生産手段の共有化が要求されると同時に、選挙への参加が訴えられていたからである。クロボトキンの主張が、穏健な社会主義者たちと一線を画する必要があるという議論によって根拠づけられていたのは、彼がそういった社会主義者の台頭を危惧していたからではないだろうか。実際、それ以前に『レヴォルテ』紙上では、この綱領が批判されていた[2, p.54]⁽¹⁶⁾。

他方ルクリュは、クロボトキンを支持しながら、ほぼ以下のように述べた。——土地や生産手段が共有化されれば、生産は共同作業であるから、生産活動に対する個人ごとの貢献を正確に割り出すことは不可能となり、その結果個人ごとに報酬を分配することもできなくなる。それゆえ、生産物は全ての構成員に帰属し、誰もがそれを消費できると定めるべきなのだ、と[2, p.55]⁽¹⁷⁾。

さらに、共産主義を擁護してカフィエロは次のように主張する。——我々は自由と平等を、すなわちアナキーと共産主義を要求する。未来社会では、諸個人に自由が与えられ、各人は自分

の欲求などに応じて自由に他の人々と組織を結成し、それらがコミュニオンなどの中で連合する。各コミュニオンは各領域において、諸領域は「民族 nation」レベルで、そして諸民族は人類として連合するだろう。他方共産主義とは、「各人はその能力に応じて、各人はその欲求に応じて」という原則に従って、全人類が全ての富を享受することを意味する。その際、共有財産を管理するような機関は不要だ、と。またカフィエロは、集産主義を次のように批判する。——「労働収益」を分配する制度を維持すれば、個人の富が蓄積されて平等は消滅し、最終的には「相続権」が導入され、さらには、「清潔」な労働と「不潔」な労働、「高貴な」労働と「卑しい」労働といった職種間の不平等が現われるだろう、と。さらにカフィエロは、食料は消費物資であると同時に生産活動に不可欠なものである、といった例を挙げながら、生産手段と消費物資を明確に区別することはできないと指摘し、消費物資は個人の所有物だとする主張を退けた。そしてこの発言を彼はこう締めくくる。——我々は共産主義者でなければならない。なぜなら、我々は共産主義において真の平等を実現できるからであり、また、クロボトキンらが述べたように、人民は集産主義者の詭弁など理解できないが、共産主義を完全に理解できるからだ。我々は共産主義者でなければならない。なぜなら、我々はアナーキストだからであり、アナキーと共産主義こそ、革命には不可欠だからだ、と[2, 56ff.; 14, p.308ff.]⁽¹⁸⁾。

先のクロボトキンの見解に対してシュヴィッツゲーベルは、労働者の間では共産主義が自由を排除した制度であると信じられており、彼らの支持を得るのには、今は時期尚早であると反論した。だが、以上のカフィエロによる発言が、出席者の共感を得たと思われ[13, p.12]、この時に採択された決議文においては、次のように主張されていた。——我々は、生産手段の共有とともに生産物が共同で消費される集産主義を要求する。それゆえ社会革命の帰結は、必然的に「アナーキスト共産主義」である、と。「進化論者」と一線を画するためというクロボトキンの主張に比べ、カフィエロが示したのは、共産主義を支持する理論上の根拠であった。これが、彼の主張が支持を得た要因の一つではなかったかと筆者は推測する。いずれにせよ、ジュラ連合で支持を得た共産主義的アナーキズムは、『レヴォルテ』紙を通じてまずフランス語圏で、次いで他の地域でも次第に普及し始めたと考えられる[6, p.111; 15, pp.14, 74ff.]⁽¹⁹⁾。ただし、ドイツ語圏のアナーキストたちも、共産主義を比較的早い時期から支持していた。彼らは後に、『フライハイム』紙上での自由社会論を批判することになる。そこで、以下では70年代初頭に時期をさかのぼり、ドイツ語圏のアナーキズム運動の成立の経緯を見ておきたい。

(3) ドイツ語圏のアナーキズム運動

1870年代半ば頃からスイスのベルンで活動していたドイツ人による組織は、76年2月以降、「ベルン社会民主協会」と名乗る。同協会には同年の秋頃までに、ともにドイツ出身の植字工であるA・ラインスドルフとE・ヴェルナー、そして同じくドイツ出身で錠前工のO・リンケといった、

後にドイツ語圏のアナーキズム運動で中心的役割を演じる人々が加わっていく。また、それ以前にブルースがベルンでジュラ連合のフランス語セクションを設立していたことも重要である。なぜなら、社会民主協会に集まるドイツ人たちは、このフランス語セクションと交流する過程で、ジュラ連合への加入を決意したと思われるからである。さらに同年7月、ブルースはベルンでドイツ語の『労働者新聞 *Die Arbeiter-Zeitung*』紙を創刊してこれを編集する。彼を助けたのは、フランス語の草稿をドイツ語に翻訳したヴェルナーらであった。間もなく同紙は、ジュラ連合の機関紙の一つとして承認される[3, p.78-114, pp.97-104; 15, pp.130ff.; 21, p.69ff.]。

翌77年6月、『アヴァン・ガルド』紙の発行を開始したブルースは『労働者新聞』の廃刊を決意するが、同紙の編集をクロボトキンが引継ぎ、これをヴェルナーらが補佐したため、同紙は同年10月まで発行され続ける[14, pp.259ff.; 15, p.43]。同紙に関してはここで詳述できないが、例えば先述したイタリア連合による共産主義を支持する決議が報じられ、あるいは「行動によるプロパガンダ」への支持が表明されもした[21, pp.79ff.]。つまり『労働者新聞』は、80年代になってからヨーロッパ各地でアナーキストによって支持される原理と戦術を、いち早く支持した新聞だったと言える。こういった同紙の傾向をつくりだしていたのは、ブルースや彼を支援したヴェルナーらであっただろう。同紙に関する詳細な検討を本稿で行う準備は筆者にはないが、後述する議論との関連から、同紙上での次の主張にだけは言及しておきたい。後にモストにアナーキズムを教えることになるラインスドルフは、77年5月、『労働者新聞』紙上でスイスの社会民主主義派を次のように批判した。——「人民国家」が「多数派の意志」を原則とするのであれば、そこでは「抵抗する少数派の意志」が軍隊と官僚、そして警察によって絶えず抑圧されるであろう、と⁽²⁰⁾。同様の見解は、後にモストによっても示されることになる。

他方、76年10月に社会民主協会が採択した綱領では、既存の国家を暴力によって廃止した後、様々な組織が自由に形成され、土地や労働手段等が共有される、と主張されていた[15, pp.131ff.]。ただし、当時協会内には戦術上で見解の相違があった。したがって、ヴェルナーらが77年6月にベルンで新たな組織を結成したのは、こういった状況への対応だった可能性が高い。その結成集会の場でリンケによって読み上げられた新組織の規約によれば、組織はインターナショナル、つまり反権威派に所属し、名称は「ドイツ語によるアナーキー・共産主義党」、その目的はスイス在住の「アナーキー・共産主義原理を主張するドイツ語を話す人々」を統一する、というものだった[15, p.134]。

以上の規約文において、共産主義という語が用いられた理由も、それが何を意味したのかも不明である[15, p.260ff.]。そもそも、この党規約が公表された当時、イタリアを除けば、共産主義的アナーキズムはまだアナーキストたちの間で影響力を持っていなかったはずである。ネットラウは、ドイツにおいては「アナーキー・集産主義」という表現が理解され得ず、他方で「共産主義」という語が「革命的」意味合いを帯びていたために、この語が用いられたのではないかと推測している[14, p.261 (Anm. 278)]。それゆえ、ヴェルナーらが実際に支持していたのが集

産主義だった可能性も残されている。だが他方で、もしこの「共産主義」の概念が、ブルースらによってその後主張されるものと同じであったとすれば、ヴェルナーらはジュネーヴ在住の人々などから、極めて短期間のうちに思想を摂取したと推測することも可能である。

以上は筆者の推測に過ぎないが、いずれにせよ、ベルンで形成されたドイツ人によるアナーキズム運動は、その後一握りの活動家たちによって続けられ、さらに彼らはドイツ各地でプロパガンダを展開した。たしかにその規模は極めて小さかったが、彼らがドイツ各地で支持者を獲得したことは、様々な文献から読み取ることができる[3, pp.87-114; 15, p.132-5]⁽²¹⁾。また、ドイツで社会主義者鎮圧法が施行された後にも、ヴェルナーは同志数名とベルリンで非合法新聞『カンプフ *Kampf*』（闘争）の発行を企てる。だが彼らは逮捕され、印刷済みの同紙千部は警察によって押収されてしまう。釈放後、ヴェルナーはジュネーヴで『レヴォルテ』紙の運営に従事し、他方ラインスドルフは、ドイツとスイスで活動を続ける。彼らと異なり、リンケは80年頃にパリで活動するが、82年にドイツで逮捕されて1年間投獄された後、ロンドンに向かう[15, pp.137ff., 157ff., 326, 328]。

後述するように、リンケはその後『フライハイム』に対する批判を開始するが、彼とともに同紙に敵対したのが、オーストリア出身のJ・ポイケルトである。彼はフランス滞在中に社会主義に関する知識を増やし、また『フライハイム』派の支持者となる。その後ポイケルトはスイスおよびオーストリアで活動し、ウィーンでは『フライハイム』派を支持する「ラディカル派」の機関紙『ツークunft *Zukunft*』（未来）紙の編集者となるなど、同派において中心的な役割を果たした。だが84年初頭、『フライハイム』の支持者であるH・シュテルマハーがウィーン近郊で警察の密偵を射殺する事件が起きると[23, pp.103ff.]、これをきっかけにして社会主義者に対する弾圧が強化される。これを逃れてポイケルトはロンドンに渡り、リンケとともに反モスト派を形成することになる[14, pp.189, 318-21, 325ff.; 18; 19, pp.177ff., 187-93]。

リンケとポイケルトは、ともにフランス語圏で共産主義的アナーキズムを学び、またこの理論の発信源である『レヴォルテ』紙から情報を得ていたと考えられる[19, pp.233ff.]。ところが、『フライハイム』派がアナーキズム路線を採択した経緯は、彼らとは異なっていた。同紙は79年1月に、ロンドンで社会民主主義派の機関紙として創刊されたが、82年12月になると同紙上ではアナーキズム路線を採択したことが明らかにされる。この間にモストは、ラインスドルフからアナーキズムに関する知識や情報を得ていたと思われる[14, p.156]⁽²²⁾。ただし彼の主導で『フライハイム』派の路線が決定されたことを裏付けることはできず、史料から推測できるのは、同紙上でアナーキズム的な主張が展開される一つの端緒を成したのが、ドイツの党「指導者」たちと『フライハイム』派との争いであったという点である。例えば80年10月に同紙上では、党員が「指導者」に「盲従」していると従来の党組織が批判される一方、これに比べれば『フライハイム』を支持する「自律的に思考し行動する」人々による少数精鋭組織の方が優れていると主張された[24, pp.97ff.]。ただしこの時点では、このような組織論は、社会革命の実現を可能とする組織

に関する議論に過ぎなかった。それがアナーキズム的な未来社会像に結びついたのは、『フライハイ』派が社会民主主義派の理念である「人民国家」と決別して以降のことだったと筆者は考える。その経緯については後述するが、いずれにせよ以上述べたように、ポイケルトらとモストらに対立する要因の一つは、アナーキズムに接近した経緯がそれぞれ異なっていたことにあったと考えられるのである。

以下では、その後『フライハイ』紙上で自由社会論が形成される過程を見るが、その前に同紙上に掲載された論説を、本稿でどのように扱うかについて述べておきたい。まず、同紙の発行者はロンドンの協会であり、モストは契約上は協会に統制される編集者に過ぎなかった。また、彼以外にも同紙の執筆者は多数存在し、さらにロンドンの協会やニューヨークの組織は、編集や運営業務、あるいは資金面で同紙を全面的に支援していた。それゆえ、彼らや読者の見解が紙面に反映されなかったなどと断定することはできない。しかもモストは、81年3月終わりから82年10月終わりまでロンドンで投獄されていた。他方『フライハイ』はロンドンで弾圧された後、82年7月初めから11月半ば頃までスイスで発行が継続され、さらに同年12月8日から発行地をニューヨークに移す。その間、同年10月末にロンドンの監獄から釈放されたモストは、12月18日にニューヨークに到着する。だが、その後彼はアメリカ各地で演説を行っていたため、しばしば編集部を不在にしていた。またニューヨークでも同紙は、支持者の様々な支援なしには成り立たなかったと考えられる[20, pp.119-23, 130-6; 26, pp.251ff.]⁽²³⁾。このような事情を考慮に入れば、同紙上に掲載された全ての無署名論説を、モストのものとして扱うことは困難となる。

他方、パンフレット『自由社会』はモストの名前で刊行されたため、同書とそこに収められた論説に関しては、彼によって書かれたものと見なすことができる。ただし、それらの論説は『フライハイ』に掲載された時点では無署名であった⁽²⁴⁾。そこで本稿で筆者は、『自由社会』に収録された論説を、モスト個人の見解としてだけでなく、『フライハイ』派の見解も反映されているものとしても扱う。では以下で、まず自由社会論の形成過程について、次いで同紙上で84年に掲載された一連の自由社会論とそれをめぐる議論について見る。

2 自由社会論の成立とその背景

(1) アナーキズム路線の採択

80年2月に『フライハイ』紙上に掲載された論説では、未来社会では様々な生産グループの代表者によって構成される「総評議会」によって、政治や経済に関する諸決定が下されると記され⁽²⁵⁾、また同年末に掲載された論説では、革命の勝利の後に、「執行部」が「テロリズム」を行うと主張されていた⁽²⁶⁾。こういった主張は、すでにアナーキズムを支持していた人々から見れば、権威主義的なものでしかなかっただろう。例えば、第一インターナショナル以来の反権威派で、

モストの協力者でもあったV・ダーヴは、モストの思想を「ブランキズムに薄められたジャコバン主義」に過ぎないと評していたが、その際彼は上述のような『フライハイ』紙上での主張を念頭においていた可能性が高い[23, p.389]。

他方、上述の記事が掲載されていたのと同時期に、モストは協会において「自由社会」に関する一連の講演を行っていたと思われる⁽²⁷⁾。それらの内容は不明であるが、演題の中にある「自由社会」という語は、革命後の未来社会を指していたと考えて間違いない。なぜなら、例えば80年11月末、同紙上では、社会主義の目標が「共有財産制に基づく自由な社会」とされ、また12月の同紙上では、革命後に「人民国家」が不要となった後に現われるのが、支配のない「自由な社会」だと主張されていたからである⁽²⁸⁾。

ここで強調すべきは、上述の80年11月の論説では、まず現存のドイツ国家の枠内で実現される「社会主義」を主張する人々の名前が挙げられ、さらにビスマルクさえ「社会主義者」と呼ばれる可能性がある指摘される一方、ドイツの社会民主主義者が目指す「民主国家」が社会主義をもたらすことなどありえないと主張されたという点である。周知の通り、ビスマルクの主導で81年から議会で提出され始めた、いわゆる社会政策諸法案は、ラディカルな自由主義者などから「国家社会主義」あるいは「共産主義」などと批判されていた⁽²⁹⁾。上述の主張は、やがてこの法案が議会で提出されることを念頭においてなされたと思われる。他方、『国家社会主義者 *Der Staats-Socialist*』紙を中心としたグループは、既存の立憲王政やキリスト教を軸にした「社会主義」の実現を主張していたが、上述の記事では、そこから出発したプロイセンの宮廷説教師A・シュテッカーの名前が挙げられていた[26, p.255]⁽³⁰⁾。つまり、国家なき未来社会を最終目標とすべきだという『フライハイ』派による主張は、一方ではビスマルクをはじめとする既存の体制を基礎とした保守主義的な「社会主義」構想を打ち出していた諸勢力と、他方では「改良」を目指していると思なされていたW・リープクネヒトのような社会民主主義者などと、自身を明確に区別するためになされたと解釈できるのである。

その後、81年終わり頃の『フライハイ』紙上では、「自由」は「人民国家」においてでなく「コミューン」において実現されると主張され⁽³¹⁾、また「中心」のない「コミューンの連合」が集権主義的な国家に代わる社会組織だと述べられていた[26, p.257]⁽³²⁾。これらの論説によって、すでに最終目標として否定された人民国家に代わる社会組織案が、より具体的に示されたのである。さらに翌82年3月、同紙上では、革命直後の社会が次のように描かれた。—— 戦闘に勝利したコミューンでは、「革命軍」が暫定的に政治権力を行使し、その諸決定を実施する機関として「革命諸委員会」が組織される。解放された諸コミューンは同盟を結び、隣接地域へと反乱を拡大する。全ての財産はコミューンが収用し、住民には住居や生活必需品が供給され、様々な生産組織が結成される、と⁽³³⁾。それと同時に描かれた理想社会像は、要約すれば次のようなものだった。—— 「社会契約」によって「連合の網」を形成する「独立したコミューン」から、「自由社会」が成立する。コミューンにおける人民集会には、両性の全ての成人が参加し、公的な問題を

討議して、場合場合に依じた決定を下す。労働可能な人々は全て生産活動に従事する。労働時間は一日数時間となり、余暇時間に人々は学問や芸術、あるいは教育活動などに従事する。強制された結婚はなくなり、犯罪はその原因とともに消滅する、と⁽³⁴⁾。

その後、82年10月末、紙上で『フライハイ』派がアナキズム路線を採択していることが明らかにされる[23, pp.392ff.; 26, p.258]。このことは、次のように説明することが可能だと筆者は考える。すなわち、党「指導者」との争いの過程で、敵対する現存の党組織が未来の人民国家に連なるものであると認識し、他方で「国家社会主義」に反対することによって、『フライハイ』派は国家なき社会を最終目標として設定するに至った。その際同派が出発点としたのは、おそらく『共産党宣言』で示された未来社会像であったであろう、と[26, pp.256ff.]。アナキズム路線の採択に関しては、これ以外にも様々な説明の方法があると思われるが、紙面から筆者が読み取れたのは、以上のような点である。

さて、ニューヨークに移動して以降に同紙上で示された未来社会像について見れば、例えば83年には、国家なき「自由社会」における「自由コミュン」等の論説や、未来社会を論じたモストの演説を報じる記事が掲載され、また同年に出版されたパンフレット『財産を食らう野獣』の中でも、モストは「自由社会」を素描していた[11, p.14]⁽³⁵⁾。ただしこういった記事やパンフレットで描かれた未来社会像は、後に自由社会論で描かれたものに比べれば、未来社会の全体像を描いたとは言えないものだった。他方、同時期に同紙上に掲載されていた記事やモストの演説、あるいは彼のパンフレットから読み取れるのは、モストラの主要な関心事が従来通り、来るべき暴力革命であったということである[11, p.11; 26, p.272]。

また、『フライハイ』紙上で未来社会像が描かれることが少なかったのは、革命後の社会に関する「理論」を現時点で完成させることは、あまり意味がないという、『フライハイ』派の基本的な見解に由来していたと思われる。例えば79年、同紙上では次のように主張されていた。——未来社会の見取り図を示せと要求する者がいる。だが、そもそも今日の社会すらそういった計画にそって作られたわけではない。また、数人の人間がひねり出した未来社会構想を全ての人々に押し付けようなど考えるのは、人民に対する侮辱である。可能なのは提案することではなく、しかもそれらは、吟味され、補完され、結び付けられ、そして最終的に拒否されるかあるいは実現されるかのものではないのである、と[22, p.168]⁽³⁶⁾。

その後モストは、82年にニューヨークで行った演説において、以下のように主張した。——これまでの革命において、「革命の諸原理」は常に「闘いの最初の時期」に広まって議論された。革命が失敗したのは、革命家たちが革命の勃発と同時に大衆を熱狂させなかったからであり、さらには大衆が興味を持つような原理を示さなかったからである。そもそも政治に無関心になっている人民が、理論上の「思索」など理解できるわけがない。むしろ、彼らにとって最も身近な問題についての議論の方が理解され得る。彼らは、既存の体制を廃止することが何であるかを理解できなくとも、空腹がなくなり服従と搾取が廃止されることの意味を理解することはできるので

ある、と⁽³⁷⁾。84年以前に『フライハイ』紙上で未来社会に関する細かな問題が議論されていなかったのは、以上のような主張を考慮に入れば、むしろ当然だったと筆者は考える。

ところが84年3月末から6月半ばにかけて、『フライハイ』紙上にはアナーキズムの理論と戦術、とりわけ未来社会に関する無署名論説が連載されるのである（最初の論説「アナーキズムとその敵」は14頁を参照）。その後、それら22の論説は表題を削除された上でつなぎあわせられ、同年7月初旬にモストの名でパンフレット『自由社会』が出版される。これらの論説は、当初からパンフレットにまとめる意図でモストによって執筆されたと考えられるが、まず最初の4つの論説では、モストらが支持する「共産主義的アナーキズム」とその他のアナーキズムや社会主義との理論上の相違が明らかにされ、次の11の論説では、主に未来社会構想が論じられていた。これら15の論説がパンフレット『自由社会』の核心部分を成したと言ってよい。さらに、これに続く5つの論説では、革命に至るまでの戦術や、革命勃発に際しての革命家の行動、そして革命に勝利した後に実行されるべき施策について述べられている⁽³⁸⁾。また、「付録」として初版の最後に収められている2つの論説は、自由社会論批判に対する反論であった⁽³⁹⁾。次いで7月下旬には、同書の第2版（15頁を参照）が刊行される。同版は、紙上に掲載された2論説⁽⁴⁰⁾が初版に付け加えられたものであった。さらに9月下旬には、『自由社会』第3版が刊行される。同版には、その後『フライハイ』に掲載された2論説⁽⁴¹⁾が、さらに追加されていた。

同紙側の説明によれば、パンフレットの読者として想定されていたのは、運動に参加して間もないか、これから運動に参加しようとする人々であった⁽⁴²⁾。たしかに、同書の冒頭では、要約すれば次のように説明されている。——今日、原理や戦術が十分な展開を遂げた労働運動において、最も進歩的な人々は、自分たちの活動を言い表すには社会主義という語の意味があいまいだと考え、「アナーキズム」という語を用いるようになった。この語の意味を誤解している連中も、それが「無支配」もしくは「支配の欠如」を意味することを知れば、真に自由な考えを持つ者は、みなアナキストでなければならない、と考えることができるはずだ。なぜなら、ある人々が他の人々を支配する状態は自由でも平等でもないからだ。支配のある所には必ず支配される人々がいる。支配される者は奴隷である。なぜなら、支配と奴隷制は対になっているのだから。つまり、奴隷制のない支配など意味をなさないものであるから、「支配 Archie」を望む者は奴隷制も望んでいるのだ。これに対して、自由を望む者は無支配を、すなわちアナキ Anarchie を追求するのである、と[12, pp.3ff.]（14頁を参照）。

ただし、同書の叙述の特徴は、当時一般にアナーキズムに向けられていた誹謗に言及しながら自身の主張を展開する、という形式に見られる。それゆえ、そういった批判についてある程度見聞きしたことのある人々に、アナーキズムに関する明確なイメージを与えること、もしくはそういった人々にアナーキズムに関する様々な偏見を放棄させることを、モストが強く意識していたと筆者は考える。ただし、初版と第2版に収められた諸論説のほとんどは、社会民主主義者からアナーキズムに対して向けられた批判に対する反論でもあったと考えてよい。こういった反論が、

Veröffentlichung:
Jahreshefte
Vierteljährliche Vorau-
sahlung 50 Cent.
Jährlich 2.
1 Ct. - 4 Pf. 10 - 12 R.

Freiheit.

Verlegt von
JUSTUS H. SCHWAR,
30 West Street,
NEW YORK, U. S.

ORGAN DER REVOLUTIONÄREN SOZIALISTEN.

No. 13.

29. März 1884.

VI. JAHRGANG.

Meuchelmörder im Purpur.

In Wien herrscht Belagerungsstand. Wehalb? Weil die Arbeiter zu denken und zu handeln begonnen haben; weil der getretene Wurm sich krümmt; und der Sklave verwohnt, seine Ketten zu zerbrechen.

Die ganze „Gesellschaft“ ist allarmirt. Die „Zivilisation“ wurde in Gefahr erklärt. Religion, Familie und Eigenthum müssen geschützt werden!

Zwei schmutzige Werkzeuge eines dem Zerfallenden Despotismus sind vernichtet worden — darum sind Himmel und Erde in Aufregung.

Man schreibt über Meuchelmörder und ist entsetzt. Meuchelmörder — wie? — Das ist dem „Haus Habsburg“ wohl noch eine total neue Sache?

Ja, ja, die Habsburger haben nie gemeuchelmordet — nie im Einzelnen, immer im Grossen.

Notizen wir!

Da ist z. B. das Jahr 1846. Damals liess sich Habsburger in Galizien nicht weniger als 1484 politische Meuchelmorde begangen, welche zum Theil mit ausserordentlicher Grausamkeit verübt wurden! Karl Kotorski bekam seine Kinnladen gebrochen, er man ihn erwürgt. Theodor und Johann Brumviszki sind im eigenen Hause umgebracht worden. Dem Ersteren wurden Arme, Beine und Rippen gebrochen, bevor seine Mörder den tödtlichen Streich führten. Mit diesem Bruder Johann ging man noch schmerzlicher um. Man schneit ihm Ohren und Nase ab, zog ihm die Haut vom Kopfe und steck ihm die Augen aus, er man ihm den Todestoss gab. Seine Frau aber haben die bestialischen Meuchelmörder gewürmt, bei dieser Thaterei zu leuchten. — Einer schwangeren Frau, Namens Kempenski, haben die Habsburg'schen Banditen Zwillinge aus dem Leibe geschneit! —

Und weshalb geschahen alle diese und zahllose ähnliche Dinge? Einfach, weil die Habsburg'sche Regierung Kenntnisse davon bekommen hatte, dass eine Verschwörung zur Befreiung Polens und der Emanzipation der Leibeigenen existire. — „Fürst“ Meternich setzte sich in Verbindung mit einem Zuchtthaler, Namens Seela, welcher das Haus seines Vaters in Brand gesteckt hatte, um dadurch eine andere Thaterei zu machen.

Dieser Mensch wurde freigelassen und an die Spitze einer Behaar ähnlicher Leute gestellt. Alle bekamen militärische Uniformen und die weitgehenden Vollmachten zum Meuchelmord gegen die Feinde der Regierung.

Die letztere zahlte für jeden abgeschneitten Kopf 5 Gulden. —

1484 Meuchelmorde wurden damals in einem Jahre — mitten im 19. Jahrhundert! — auf Befehl der Habsburger ausgeführt! —

Hat damals vielleicht auch nur eine einzige Regierung Europa's gegen die Monstrositäten protestirt? Nimmermehr! — Haben da etwa die Pfaffen Mordio geschrien? Nicht einer. — Oder hat etwa die Presse öffentliche Anklage erhoben gegen die Meuchelmörder im Purpur? Mitnichten! Sie schwieg sich völlig darüber aus. —

Ist es denn aber nicht eine Schmach, dass diese meuchelmörderischen Habsburger noch heute herrschen? Ist nicht ihr blosses Dasein eine Schändung der Kultur, eine Insultierung der Menschheit?

Da schreit man über die Hinrichtungen zweier schuftiger Polizeisergeanten — und hier könnte man über nahezu anderthalb Tausend politische Morde, begangen durch die Regierung, Betrachtungen anstellen. Und die Verbrecher — die Habsburger — sind noch immer nicht bestraft!

Der politische Meuchelmord wird allerdings überall als ein gewöhnliches Regierungsmittel betrachtet, allein so schamlos und massenhaft,

wie seitens der Habsburger, ist er nirgends angewendet worden.

In allen Ländern, wo diese Ungeheuer je etwas zu sagen hatten, hinterliessen sie blutige Spuren ihrer unsäglichen Verbrechen.

Die Schandthaten der Habsburger sind in blutigen Zügen eingetragen in die Annalen der Niederlande, von Kastilien und Aragonien, von Sizilien und Böhmen, von Deutschland und Ungarn, von Galizien, Venedig und der Lombardei. Überall trieben sie das gleiche feige Spiel von meuchlerischer Gewaltthätigkeit und heimtückischer Infamie.

Solche Missetheaten sollten als Auswürflinge der Menschheit angesehen werden, gegen welche Krieg auf Tod und Leben zu führen ist.

Ist unser obiges Beispiel über das meuchelmörderische Wesen der Habsburger noch nicht genug? Wir führen hier noch einige an:

Etwa 2—4 Jahre lang nach den Befreiungsversuchen des Jahres 1848 walteten die Habsburger im Blute der Italiener, welche für ihre Unabhängigkeit gekämpft. Das Kriegegericht zu Padua liess im Jahre 1849 nicht weniger als 2514 Freiheitskämpfer erschliessen; im Jahre 1850 wurden 1329 gestandrecht; anno 1851 fanden 223 den Henkertod. Endlich im darauffolgenden Jahre fanden ebenfalls noch zahlreiche Exekutionen statt. Zusammen genommen sind im Laufe von vier Jahren in der Lombardei und in Venedig durch die Habsburger 4470 edle Menschen hingeschlehtet worden.

Im Toskanischen liess sich Scheusale am 13. und 14. Mai 1849 ohne jeden Schein einer Untersuchung 200 Freiheitskämpfer erschliessen, 40 weitere am 12. Sept. 1851.

In Neapel hauste damals der dem Despotenwahn sinn verfallene König Bomba. Derselbe handelte aber notorisch nur auf Geheiss der Habsburger. Unter deren Eingebungen liess er im Jahre 1847 bereits 12, l. J. 1848 aber 37 seiner politischen Opponenten erschliessen. Auf der Insel Sizilien wurden vom Juli 1848 bis zum August 1851 ca. 1600 „Rebellen“ erschossen und erdrosselt.

Im Kirchenstaate haben die Habsburger Soldaten vom 23. Mai bis zum 23. Juni 1849 nicht weniger als 208 Personen aus politischen Gründen ermordet.

6600 Meuchelmorde in Zeit von vier Jahren, begangen auf Anordnung jenes Habsburgers, der heute noch auf dem Thron von Oesterreich sitzt! — Wird der Kunde nie seine Verbrechen büssen müssen? Wir hoffen doch — und war bald.

In Ungarn trieben es die Habsburger wie in Italien. Als in Wien im März 1848 die Revolution ausgebrochen war, da versprach die kaiserliche Kanaille den Ungarn Alles, was sie wünschten. Kaum vermochte aber die Bestie wieder eingermessen zu schmecken, so wurden die Serben und Kroaten unter dem Behausale Jelaschich organisiert und gegen die Ungarn geschickt, unter denen sie wie Hyänen rasten, wobei ihnen die Bussen halfen.

Nachdem Tausende von Freiheitskämpfern auf dem Wege des Massenmordes und durch den Verrath des Behurken Gorgey hingeschlehtet waren, that auch hier das Standrecht seine Schuldigkeit. Das Hängen und Füsteln wegen „Hochverraths“ nahm kein Ende.

Wacht' ein Hahn! Die schändlichsten Verräther an der Menschheit liessen ihre Widersacher wegen „Hochverraths“ morden! —

Siehe da, o Volk! Franz Joseph Habsburg! Seine Hände triefen vom Blute der Gerechten. Er ist ein tausendfacher Meuchelmörder! Blicke ihn!

SCHWARZ.

— Zur Bewachung des Gefängnisses, in welches Genosse Kammerer geworfen wurde, sind nicht weniger als 100 Soldaten beordert worden.

Der Anarchismus und seine Feinde.

Wenn vor wenigen Jahren noch ein Durchschnittsgenosse von Sozialismus reden hörte, so dachte er an nichts Anderes, als an eine beschnittene allgemeine Theoretik. Weniger versagte Leute waren zwar nicht geneigt, sich ebenso zu blamiren, gleichwohl waren ihre Vorstellungen vom Sozialismus selten korrekt. Sie hatten dabei in der Regel die Schwafelreden eines St. Simon, eines Fourier, eines Capet und ähnlicher Phantast-Philosophen im Auge und konnten mithin den wahren Kern des modernen Sozialismus nimmermehr verstehen. Eine dritte Sorte gab es, welche zwar wusste, wie die Dinge lagen, die aber dennoch auf die Argumente der Ganz- und Halbphilister eingiengen und wider besseres Wissen den Sozialismus harkirren und dessen Träger den Lächerlichkeit preisgeben wollten. Das waren die Arguren von Presse, Kanzel und Katheder — das waren die Lohnschreiber der herrschenden Klassen, die literarischen Prostituirten der heutigen Unordnung — ein ganz verächtliches Pack.

Heute, wo sich in der Arbeiterbewegung eine beträchtliche Entwicklung in prinzipieller, wie in taktischer Beziehung vollzogen hat, und wo die fortgeschrittensten Geister des kämpfenden Proletariats begriffen haben, dass das Wort Sozialismus ein viel zu weitläufiges und unbestimmtes sei, um ihre Bestrebungen zu deken, weshalb sie den Anarchismus auf ihre Fahne geschrieben haben, begegnet man der nährlichen babylonischen Begriffsverwirrung hinsichtlich dieses Wortes, wie sie seiner Zeit bei der Bezeichnung „Sozialismus“ obgewaltet hat.

Die ganz Böden, nämlich diejenigen, welche ein zu kleine Hirn haben, um dieses Fremdwort sich in ihre Deutsche übersetzen zu lassen, können es nimmermehr in ihren Schmelz hinein bringen, dem „Anarchismus“ Nichterheerhaft oder Herrschaftlosigkeit bedeutet. Würden sie erst diesen richtigen Sinn des Wortes verstehen, so müssten sie ganz von selbst begreifen, dass jeder wirklich freudlich gemaunte Mensch Anarchist sein muss, wenn er sich keine Halbheiten zu Schulden kommen lassen will.

Denn nur versteckte Bosheit oder unheilbare Dummheit wird behaupten wollen, dass ein Zustand, wo irgend welche Menschen über andere herrschen (d. h. eine „Archie“ ausüben), ein freudliches oder gar gleichheitliches Verhältnis darstelle. Wo geherrscht wird, müssen Menschen existiren, die beherrscht werden. Beherrschte aber sind nichts Anderes, als Knechte; da der Gegensatz von Herrschaft Knechtschaft ist. Wer also irgend eine Herrschaft (Archie) will, der will auch die Knechtschaft, weil Herrschaft ohne Knechtschaft keinen Sinn hätte. Wer aber die Freiheit will, der erstrebt die Nichterheerhaft, also die Anarchie.

Hieraus ergibt sich, dass in Wirklichkeit nur zweierlei Menschen mit Bewusstsein Feinde des Anarchismus sein können: Herrschsuchtsige und Knechtsuchtsige.

Entschuldigung können nur diejenigen anbringen, von denen wir oben sagten, dass sie zu dumm sind, das Wort Anarchie richtig zu deuten. Unsere vorstehende Erklärung dürfte aber wahrlich durchsetzlich genug sein, um selbst von einem Zuhörer verstanden zu werden.

Uebrigens sind die Feinde des Anarchismus aus Missverständnis nicht die schlimmsten, es sind dies vielmehr die Widersacher des Systems aus unedelmotiven Motiven: Herrschsucht und Egoismus.

So schmutzig deren Grund ist, den Anarchismus zu begreifen, so verächtlich sind die Waffen, welche sie in dem Kampfe gegen denselben in Anwendung bringen.

Es fällt diesen Leuten nie ein, den Lesern ihrer Bücher und Blätter oder den Hörern ihrer

Die

Freie Gesellschaft.

Eine Abhandlung über Principien
und Taktik der kommunistischen
Anarchisten.

Nebst einem polemischen Anhang

von

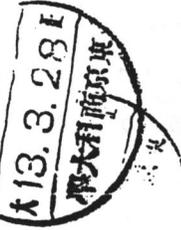
JOHANN MOST,

50 Erste Strasse, New York.

Im Selbstverlage des Verfassers.

Druck von SAMISCH & GOLDMANN, 190 William Str., N. Y.

1884.



Johann Most.

ヨハン・モスト (1846-1906)

どのような批判に向けられていたのかを理解するために、以下では社会民主主義派によるアナーキズム批判と、これに対するモストの反論について見る。

(2) 社会民主主義者に対する反論

ドイツ語圏で社会民主主義派がアナーキズム派に向けた批判のうちで初期のものとしては、70年代前半にエンゲルスがバクニン派に対して行ったものや、1877年に『労働者新聞』派に対してスイスの社会民主主義者が展開したものが挙げられる⁽⁴³⁾。次いで80年代前半には、ドイツの社会民主主義派の機関紙『ゾツィアールデモクラート *Der Sozialdemokrat*』紙上で、主に『フライハイ特』派を対象として、E・ベルンシュタインによるアナーキズム批判が展開される。例えば80年10月に同紙上では、アナーキズム社会では、それぞれの利害に基づいて結成される諸組織のあいだで生産品の販売をめぐる「自由競争」が展開されると述べられ、アナーキズムの未来社会が現存の経済システムと何ら変わらないものとして描かれた。また同年11月には、そういった利害の対立が人間を「原子化」する危険性があると主張されていた。さらに83年1月には、アナーキズム社会では、需給法則に従って生産品の価格が決定され、商品の交換を媒介する貨幣が使用されるため、「不平等と腐敗」が存在すると述べられていた⁽⁴⁴⁾。

『自由社会』に収められた少なからぬ論説が、以上のような批判に対する反論であったのは明らかである。例えば同書においては、「自由競争」を承認する「旧来のアナーキスト」と『フライハイ特』派とが異なると強調され、「個人主義的アナーキズムの」あるいは「ブルードン主義者の」「セクト」と同一視されることに対する抗議の意志が示されていた[12, pp.30-2]。もちろん、アナーキズムを個人主義あるいはブルードンの思想として理解する「個人主義者」もしくは「個人主義的アナーキスト」と呼ばれる人々が、当時独自の主張を展開していたのも事実である。しかも後で見ると、彼らは『フライハイ特』派を批判していた。それゆえ同派は、自身と個人主義者とが同一視されることについては、なおさら神経質に反応したであろう。

他方、次のような主張も見られる。——自由が増大して強制が少なくなり、さらに好みや才能、そして能力を伸ばすことが可能になればなるほど、対立や分裂の原因がなくなり、人間は連帯の感情を強める。個人の自由が増大すれば、人類が原子のように分解するなどと考えられがちだが、むしろ人間は相互に敬意と愛情を示すようになる、と[12, p.54]。これもまた、社会民主主義派からの従来の批判に対する反論だったと考えられる。ただし、『自由社会』での主張をさらに検討すれば、そこでは社会民主主義派における新たな動向を視野に入れた主張もなされていたことがわかる。以下、この点について検討していきたい。

83年初頭、エンゲルスによる『ユートピアから科学への社会主義の発展』のドイツ語版が刊行される。そこでは、特にアナーキストと社会民主主義者との相違が「過渡期」を認めるか否かという点であると規定される一方、国家なき社会を最終目標にするという点で両者に違いがないこ

とが明らかにされていた⁽⁴⁵⁾。また、同年10月に販売され始める『婦人論』改訂版でA・ペーベルは、『反デューリング論』の一部を引用しながら、社会主義の最終目標が国家なき社会であることを初めて明示する[1, pp.178ff.]。ただし、エンゲルスやペーベルの見解が、全ての社会民主主義者によってすぐさま受け入れられたとは断定できない。例えば、エンゲルスの見解が少なからぬ社会主義者の間に「混乱」をつくりだしたという主張に対し、バルンシュタインは『ゾツイアールデモクラート』紙上で反論しなければならなかったのである⁽⁴⁶⁾。

以上のような状況は、『フライハイ特』派においては、さしあたり肯定的に捉えられたと思われる。というのも、同派から見れば、敵対する社会民主主義派は理論上の混乱に陥っていたのであり、またエンゲルスの見解は、特に最終目標を国家なき社会に設定しているという点で、アナキズム派の理論と一致し、同派の正しさが確認されたからである[26, pp.270ff.]。だが他方でこういった状況は、『フライハイ特』派に新たな問題を提起した可能性もある。なぜなら、社会民主主義派の一部が最終目標を人民国家から国家なき社会に設定しなおしたことによって、従来のように、人民国家を拒否してアナキキーを支持するだけでは、『フライハイ特』派はアナキズムと社会民主主義の相違を説明できなくなったからである。したがって、84年の時点でモストらは、自身の主張する「アナキキー」が何であり、それが一部の社会民主主義者によって主張される国家なき未来社会といかに異なるのかを示す必要に迫られていたと筆者は考える。

たしかにモスト自身の説明に従えば、彼が『自由社会』を刊行した理由は、「非常に多くの方面」からそのような書物が求められた、というものでしかなかった。なぜなら、モストにとっては、ヨーロッパが革命運動の「前線」なのであり、それゆえ「未来についての哲学」などよりも現在の「闘争」の方が重要だったからである[15, p.381ff.; 20, p.234]⁽⁴⁷⁾。ヨーロッパに「前線」があるというこの認識は、当時『フライハイ特』派の支持者たちによるテロ事件がドイツ語圏で頻発していたという事実から得られていた可能性が高い[24, pp.103-6]。したがって、「前線」という言葉に示されていたのは、ヨーロッパが革命勃発の前夜にあるという認識だったと筆者は考える。またモストは当時ダーヴへの手紙の中で、工場で働きながらダイナマイトの製造や使用について学んだ上、ダイナマイトなどを自宅に運び込んだという事実と、それらをベルギーなどを経由して、ヨーロッパに輸送するというアイデアを明らかにしていた[15, p.382]⁽⁴⁸⁾。

とはいえ、『自由社会』の執筆は、未来社会に関する詳細な議論は無意味だとしてきた『フライハイ特』派の従来の見解から逸脱したものだった。したがって、先に述べたように筆者は、この逸脱を促した重要な要因の一つが、社会民主主義とアナキズムの理論的相違が不明確になりつつあった、当時の思想状況にあったと考える。というのも、そういった状況においては、支持者が明確な理論を求め、他方でモスト自身も未来社会像を支持者に示さねばならないと自覚していたとしても不思議ではないからである。

実際『自由社会』においては、最終目標は社会主義に基づく国家であるとする見解に対しても、「過渡期」の必要性を訴える主張に対しても批判が加えられ、例えば、そこでは次のように述べ

られている。——国家は階級支配のための暴力機構に過ぎず、階級特権の廃止とともに階級それ自体も廃止されれば国家は不要になる。それゆえ、人民国家を含めたあらゆる国家は社会主義者の目標たりえない、と[12, pp.10-3]。他方、現存する様々な組織は国家がなくとも存続し発展し得ると述べられ、国家が消滅すれば社会が「原子」に分解するという見解が批判されている[12, pp.17ff.]。さらに、次のように主張されている。——所有階級との妥協を通じて、徐々に財産を収用するのであれば、「闘争」を終結させることはできない。「反動家の絞首刑」と「資本の押収」こそが重要なのであり、「過渡的」国家権力など不要である。たしかに、「絶滅と報復のための闘争、および財産の押収」が実行されるのは事実上の「過渡期」であるが、それは数ヶ月間に過ぎないのである、と[12, p.72ff.]。

以上のような一連の主張には、人民国家を目標とする旧来の社会民主主義からも、ベーベルのような社会民主主義派からも一線を画そうとするモストの意図が読み取れる。また、エンゲルスの規定と異なり、モストは必ずしも「過渡期」そのものを否定していたわけではなく、その期間やその際に実施される措置が何であるべきかを問題としていたと言える。ただし彼は、これだけで社会民主主義者とアナキストとの理論上の相違を説明したのではなく、さらに未来社会の組織における相違点を強調している。例えばモストは、「集権主義的組織」は常に「兵舎」のような制度と結びつき、その帰結は圧政であり、あるいは個人が組織に埋没することだと主張している[12, p.20]。ここで想定されていたものが具体的に何であったかは不明だが、例えば、『婦人論』改訂版でベーベルが描いた、次のような未来社会像だった可能性もある。——社会主義社会においては、あらゆる活動を掌握する「管理機構」が必要である。また、「コミュン」やその中の地区単位で選出された「信任者」が、各地区の「管理機構」で活動し、これらの地方組織が「中央管理機構」によって統括される、と。たしかに彼は、中央の組織が「支配的権力」を持たず、組織には「階層制」が存在しないと強調している。だが、統計による情報が一括して集計されたり、計画に従って全社会が組織される、といったベーベルの構想は[1, pp.152ff.]、連合主義的原理によって立つ『フライハイ』派から見れば、集権主義的社会でしかなかったであろう。

他方モストの描く「連合主義的」組織は、例えば次のように説明される。——そこでは、労働者が自分の好みに従って自由に職場を変えることが可能であり、生産組織ごとに労働時間等が決定できる。それらの組織は、生産活動に応じて多種多様であり、それぞれは自立しながら、それぞれの目的に応じて結びついて社会を網のように覆う、と[12, p.18-21]。また、「コミュン」については次のように述べられている。——未来の「コミュン」は多数の地域共同体から、あるいはそれが大都市であれば各地区から構成される。ただし「コミュン」は、それぞれの目的に応じて形成される。例えば、消費や分配をつかさどるのは「経済コミュン」であり、そこでは「役員」が活動するが、彼らは生產品の交換等に関する「管理活動」以外の問題には関与できない。それ以外にも、教育や芸術・科学・学問の促進、老人や弱者などの世話、衛生業務といった様々な目的に応じて「コミュン」が結成される。これらの「職業コミュン」が地域を超え

て「連合」することも可能である[12, p.52-3]。また、各「連合」は、拘束委任を受けた代議員による会議を開催するだろう。ただしそこで決議は下されず、会議の役割は話し合いに限定される、と[12, p.55ff.]。

もちろん、これだけでベーベルの描く社会主義社会との相違が明確にされているとは言えないかもしれない。だが、政治的・経済的な中央機関を「連合主義」によって排除しようとしている点、あるいは「コミュニン」等の諸団体ごとに、「場合場合による決定」が、各団体に所属するメンバーが任意に参加する集会の場で下される[12, pp.15, 57, 60]、といった主張に着目すれば、モストが自由社会をベーベルの未来社会像と異なる原理によって貫かれた社会として描こうとしていたと、解釈することができるのである。

ただし『自由社会』には、社会民主主義者P・グロットカウに対する反論として読み取れる箇所もある。グロットカウが描いた未来社会は、社会民主主義者が主張してきた旧来の人民国家ではなく、国家なき社会であった。ただし、彼はエンゲルスと異なり、「過渡期」の有無によってでなく、主に未来社会における社会組織のあり方によって、アナーキズムと一線を画していた。それゆえモストは、こういった未来社会像と自身のアナーキズムとの違いを強調することが必要だと考えたであろう。以下でこの点について見ておきたい。

84年5月、シカゴで「アナーキズムか共産主義か」というテーマで、グロットカウとモストによる公開討論会が開かれた。両者は70年代以来、旧知の間柄である[20, pp.44ff.]。ただしグロットカウは、モストに先立つこと3年以上前に渡米していた。その後彼は、シカゴで社会民主主義派の機関紙を編集し、さらに80年には、アメリカの社会主義労働者党 (Socialistic Labor Party) の執行部と対立して、同党からの社会革命派の分裂を促し、しかも同派による全国会議の開催を実現するために活動した⁽⁴⁹⁾。その努力は83年10月に開催されたピッツバーグ会議に結実するものの、グロットカウは会議に出席しなかった。この会議によって、アメリカにおける最初のアナキストの全国組織「インターナショナル International Working People's Association」(以下IWPAと略称)が結成され、その綱領である宣言文が採択された[20, pp.145-50]。だが、グロットカウはこの宣言文を承認しなかった[4, pp.40ff.]。彼とアナーキズム派との確執は、この頃から始まったと推測できる。

さて、グロットカウが討論の場で明らかにしたアナーキズム批判および彼の支持する「共産主義」は、ほぼ次のようであった。――アナーキズムが個人主義の原理である一方、共産主義は連帯の原理であり、両者は相容れない。モストらの「アナーキズム的共産主義」は個人と諸グループの自律を主張し、いかなる法律も拒絶し、「多数派による支配」を認めない。彼らは「個人の恣意」を社会全体の幸福よりも重要だと考える。アナーキズム社会では、コミュニンや協同組合が財産を所有することが前提とされ、また生産物は生産組織に帰属するとされている。こういった各組織の経済的自律によって、「共産主義」が廃止されて私有財産制度が復活するであろう。これに対して我々「共産主義者」は、生産手段を社会の共有財産とすることを目指す。また、個

人や官僚による支配に反対する一方、社会全体の利益には個人が従属することを要求する。共産主義社会では国家は必要とされず、様々な問題が直接立法によって解決され、また、「アナーキズム社会」と異なり「多数派」による支配が認められるのだ、と[4, pp.2-23]。

これに対してモストは、以下のように反論した。——グロットカウの見解は、これまでアナーキズムに対してなされてきた不当な批判をまとめたものに過ぎない。彼は、自身が支持する「共産主義」に国家が存在しないなどと主張しながら、最終的に彼が描いたのは地球全土を覆う国家に他ならなかった。これに対して自分が主張する自由社会においては、国家や政府が消滅し、商人などの介在なしに、生産者同士が生産品を交換する。労働手段は社会の共有財産であり、各生産組織に分配される。またグロットカウが擁護する「多数派による支配」とは、圧政と個人の均質化を意味するが、アナーキストは個性を重んじる。グロットカウの言う「連帯」とは、個性を押しつぶす圧政なのである、と[4, pp.25-38]⁶⁰。

このように、双方の主張には、未来社会における国家の不在を主張しているという共通点があった。だがモストとグロットカウは、相手の主張を文字どおりに受け取らず、それらが論理的にいかなる帰結をもたらすかに関する各自の解釈を示すことに終始した。ただし、この論争以前から『フライハイト』紙上に掲載された論説では、例えば「多数派」の支配に対する批判が展開されていた。それによれば、集権主義的な社会における「支配する多数派」は、労働をしない「多数派」が「少数派」に労働を強制して搾取するか、あるいは、多数の「怠け者」からなる巨大な官僚機構が大衆を搾取し抑圧する可能性がある[12, p.24]。その後『フライハイト』には、明らかにグロットカウに対する批判を意図した同内容の論説が掲載され、それらは『自由社会』の付録および第2版に収録されたのである[12, pp.77-94]。

以上見てきたように、モストは、社会民主主義派による様々な批判に対する反論を意図しながら自由社会を描いていた。その際彼は特に、「連合主義」をアナーキズムの核心として強調し、他方で血なまぐさい革命の「過渡期」の必要性を説いた。以上の主張によってモストは、人民国家を目標とする社会民主主義や「国家社会主義」、あるいはグロットカウやベーベル、さらにはエンゲルスなどが描いた国家なき未来社会像などから、自由社会を区別しようと試みたのだと筆者は考える。

他方でモストは、個人主義的アナーキストとの相違として、とりわけ、自由社会が生産手段の共有を基礎としていることを強調した。ただし、個人主義者から見れば、『フライハイト』側が示す未来社会は集権主義者の「国家社会主義」と何ら変わらないものであった。そこで彼らはモストの未来社会構想を批判し、これに対する反論が『フライハイト』紙上で展開される。このような両者の主張を検討することを通じて、自由社会論が当時アナーキズムと呼ばれた多様な思想の潮流において、いかなる位置を占めるかを確認することができるであろう。そこで、これまで述べてきた時期からは少し後のことになるが、両者の論争を以下で見ることにする。

(3) 個人主義的アナキストとの論争

『リバティアー Liberty』紙は、アナキズム史上重要な役割を演じた英字新聞の一つであり、ボストンとニューヨークで1881年から27年間にわたって刊行された。その編集者B・R・タッカーは、J・ウォレンやE・ヘイウッド、さらにブルードンなどの著作から学び、独自の思想を形成する[9, pp.202-19]⁽⁶¹⁾。その特徴を要約すれば、以下ようになる。——言論や出版の自由があれば、暴力を行使する必要はなく、大多数の人々が国家は不要だと確信した結果、「社会革命」の達成が保証され、それは、国家による貨幣の独占の廃止、さらには地代、関税、特許権を廃止することによって実現される。そのために効果を発揮するのは、啓蒙活動や税金の不払い、さらには徴兵忌避といった「消極的抵抗」である。こうして未来社会では、自由な諸個人あるいは彼らが自発的に結成する諸団体による「最も自由な競争」が実現される、と[5, pp.188-95]⁽⁶²⁾。また80年代にタッカーは、現存の社会においてアナキストが銀行の設立と通貨の発行によって独自の事業を展開するという構想を示していた。だが1911年になると、独占企業が巨大になったため、「政治的あるいは革命的な諸力」による「解決」もやむをえないと述べることになる[9, pp.249, 273ff.]。

『リバティアー』紙上では一貫して社会民主主義者のような「国家社会主義者」が攻撃されたが、他方では『フライハイト』派などに対してもしばしば批判がなされた。例えばタッカーによるモストに対する批判は、すでに84年5月になされている。ただしこれは極めて短いものに過ぎなかった⁽⁶³⁾。だが同年9月に掲載されたH・アップルトンによる次の論説は、個人主義者が『フライハイト』派の主張をいかに解釈したかを明らかにしている。——共産主義は物事を人為的に平準化するが、アナキストはそのような機構に反対する。それゆえ、アナキズムは共産主義に対立する思想である。だが「国家共産主義」を主張するモストは、革命後に全ての人々をコミュニンに組織し、また、かつての有産階級を弾圧しながら、全人類を平準化するだろう。これに対してアナキストは、既存の制度を一気に破壊しようとせず、それが次第に崩壊するに任せ、他方では政府の支援する「階級銀行」と競争する「自由銀行」や、政府による郵便と戦う私設郵便を設立する権利を要求する。またアナキストは、土地を占拠して耕すことによってその土地を獲得する権利を要求し、また教会によって唱導される愛に対抗する「自由な愛」を实践すること、さらに課税されないことを要求するのである、と⁽⁶⁴⁾。

その後、アップルトンのモスト批判は、翌85年4月にも『リバティアー』紙上に掲載され、そこで彼は最近『フライハイト』紙上に掲載された論説⁽⁶⁵⁾を引き合いに出しながら、ほぼ以下のように主張した。——「国家社会主義者」は既存の政府を撤廃せよと主張するが、彼らはそれに代わってあらためて国家を設立することを考えている。例えばモストらは、全人類に覆いかぶさる「機構」を提案するが、それが野蛮な暴力の手段となるのは明らかである。そこでは諸個人が諸グループへの加入を強制させられ、各人がそこから自発的に立ち去ることはできない。いかなるグループとも関与せず、自身の労働で生計をたてたいと願う孤立した個人を、モストは考慮していない。

「機構」は圧政をもたらすが、真の社会秩序は、個人の自由と基本的諸権利が承認されれば、静かに多くの場所で生まれるのである、と⁽⁵⁶⁾。

以上の論説では直接引用されなかったが、「機構」が批判されているという点から考えて、そこで念頭におかれていたのが、同年3月に『フライハイ』紙上に掲載された論説であった可能性がある。そこでは、ほぼ次のように主張されていた。——プロレタリアートを隷属状態に置くための機構が国家であり、これを人民国家にかえたところで、新たな階級支配が形成されるだけである。今日、人民国家の理念を支持する「指導者」たちが地位と権力を乱用していることから、これは予測可能だ。それゆえ、我々は「諸グループの自由連合」を支持する。もちろん、国家に反対しながら、「管理」のための「機構」が必要だと主張する人々もいるが、彼らは「共産主義国家」を構想しているに過ぎない。これに対して、我々が言うところの「管理」とは、「簿記」のような業務でしかなく、国家のような専制的性格を持たないのである、と⁽⁵⁷⁾。

つまり、以上の論説を文字どおりに理解すれば、そこでは「機構」が退けられ、「諸グループの自由連合」に基づく未来社会が支持されているのであるから、少なくとも『フライハイ』側から見れば、上述のアップルトンによる批判は的外れであった。しかも彼の非難は、モストがグロットカウに対して向けたものと同様であり、『フライハイ』側にしてみれば、自身がこのように非難されることは心外だったであろう。その後同紙上に、『リバティー』への反論が掲載され始めたのは、『フライハイ』側がアップルトンの上述の主張を極めて不当なものとしたからであろうと筆者は考える。

85年5月、同紙上では次のような反論がなされた。——社会民主主義者による集権化された共産主義は、官僚制や圧政をもたらす。これに対して「共産主義的アナーキスト」は、個人の自由を保障するために「連合主義」を主張する。つまり我々は、「機構」ではなく、個人の欲求や好みなどに従って自由に様々な組織が形成されることを要求している。もちろんこれは強制ではないし、『リバティー』の執筆者がお望みなら、未来社会で個人が孤立することも自由である。他方で『リバティー』派は、国家が廃止されても私有財産が存続し、人間同士の「生存競争」が終わらないと主張する。なぜなら彼らは、人間が利己主義に支配されるだけの獣であり、彼らの間に「友愛の精神」などゆきわたらないと想定するからだ。だが、今日見られる利己主義は、それを生み出した諸状況とともに消滅するであろう。これによって実現されるのが「平等と友愛」であり、それとともに我々は「個人の自由」を未来社会の基本原則と見なす。それゆえ我々は、共産主義者であると同時にアナーキストなのである、と⁽⁵⁸⁾。

だが、これに対してアップルトンは、次のように反論した。——モストは、共産主義社会でも個人が孤立できると答えた。だが彼が書いたパンフレット『財産を食らう野獣』によれば、革命に勝利した後、旧来の社会をすみやかに破壊するため、革命派によって「人民の敵」が虐殺され、土地や建物がコミュニンによって接収されるという。だからコミュニンは、私の所有する土地や家ばかりか、金や洋服も没収するだろう。こうして、みぐるみはがされてから、私は孤立するこ

とを許可されるであろう、と。さらに彼は以下のように批判した。——モストのような人々は「進化」を待たずに革命を要求し、圧政者たちをすみやかに排除することを望む。そのために彼らは、特権的な「機構」を作ってこれを動かすことを急ぐあまり、神聖な個人の権利を忘れ、自分たちの夢を、血と残虐性で彩るのだ、と⁽⁵⁹⁾。

後に『フライハイ』側は、このアップルトンの主張を紙面で紹介したものの、それを単なる「俗物の嘆き」に過ぎないと一笑に付しただけだった⁽⁶⁰⁾。革命における自由の抑圧という問題は、『リパティー』派によって初めて提起されたと思われるが、『フライハイ』側はこれを議論の対象として重視しなかったようである。他方アップルトンは、『フライハイ』側が描く未来社会像を、文字どおりに理解しようとしなかった。それは、彼がモストの示す革命観に基づいて、同派の「共産主義」もまた抑圧的な「国家共産主義」に過ぎないと解釈していたからであろう。いずれにせよ、双方は自身の主張を展開することに終始したため、議論は平行線をたどったに過ぎなかったと言える。

ただし、当時タッカーは、アップルトンよりも詳しくモストの主張を分析し、まずモストが「労働に応じて」報酬を得るという原則を支持しながら「共産主義者」と名乗っているのは矛盾していると指摘する。なぜなら、「労働に応じて」という原則は、私的所有を承認するものだからである。さらにタッカーは、この原則と、「全ての富」を接収してこれを人民が共同で管理する、というモストの主張が相容れないと述べている⁽⁶¹⁾。とはいえタッカーも、アップルトンと同様、モストが実質的には「共産主義者」と見なしていたと思われる。

タッカーが述べているように、「労働に応じて」という原則において、『フライハイ』派と『リパティー』派は一致しているようにも思える。ただしモストによれば、個人主義者は価値の評価を「自由競争」に委ね、個人の収入を平等にすることに反対し、「才能」なども評価の基準にせよと要求する。それゆえモストは彼らを非難し、「労働収益」は労働時間に基づいて算出しなければならないと主張した[12, pp.99ff.]. また『フライハイ』紙上でも、次のように述べられていた。個人主義者の理想社会には、貧富の差と「自由競争」がある。だから、彼らはやがて貧乏人に脅かされて、再び国家を作り出すだろう。だが不満を持つ貧乏人が革命を開始し、「連合主義的組織」によって個性が保障された「共産主義的」諸制度を作るであろう。つまり個人主義者のアナーキズムは、「万人の万人に対する闘争」をもたらし、その結果、再び革命によって葬られる運命にある、と⁽⁶²⁾。

このように、『フライハイ』側は『リパティー』派との相違を強調していたのであるが、他方で、土地や生産手段を共有にするという主張に注目すれば、『フライハイ』派の「共産主義」は、クロポトキンらの主張する共産主義的アナーキズムと共通点を持っていた。だがタッカーの指摘からもわかるように、同派の「共産主義」は実質的には集産主義であり、「欲求に応じて」消費するという原則とは一致しないものだった。ただし、共産主義者との相違点は、84年の半ば以降から、モストが徐々に認識し始めたものと思われ、それ以前に彼が強調していたのは、これ

まで見たように、自派と個人主義的アナキストや社会民主主義派との相違だけであった。だがその間に、共産主義者たちが、自由社会論に対する批判を始める。そのために、その後『フライハイト』紙上では、彼らに対する反論が展開され、それらが『自由社会』第3版に収録されることになる。以下では、再び時期をさかのぼって、この論争について見ていきたい。

3 共産主義者との論争

(1) ポイケルトによる批判

『フライハイト』紙上では79年以来、しばしば『共産党宣言』の一部が引用され、また「万国のプロレタリア団結せよ」が、スローガンとして同紙のタイトル部分に掲げられていた。また、そもそも同紙の支援団体は共産主義労働者教育協会（傍点は筆者による）であり、しかも同協会は80年末頃、ロンドンで『共産党宣言』のドイツ語版パンフレットを刊行していた[26, p.252-5]⁽⁶⁵⁾。さらに『フライハイト』紙上では、自派の目標とする社会が土地や生産手段が共有化される「共産主義」であるという見解も示されていた⁽⁶⁶⁾。以上の経緯を考慮すれば、『フライハイト』派が、84年に自派の原理を「共産主義的アナキズム」と命名したことは理解できる。ところが上述した通り、同紙上で「共産主義」と呼ばれた制度は、実はクロポトキンらの主張した共産主義的アナキズムではなく、彼らが退けた集産主義にはかならなかったのである。ここに、『フライハイト』派を共産主義者たちが批判した主な理由があった。

例えば、84年6月、「働かざる者、食うべからず」という原則を支持する、とモストが演説の中で主張したことが『フライハイト』で報じられたが、これは『レヴォルテ』紙上で以下のように批判される。——労働への報酬が存在する社会では、能力の低い者の稼ぎは少なく、そうでない者は「労働の貴族」となるだろう。さらに、もし「怠け者」が多ければ、やがて彼らは食料を要求するようになるだろうから、彼らに対抗するための権力が必要となり、ついには今日と同じ状態に復帰するであろう、と⁽⁶⁶⁾。ただし、ここで『レヴォルテ』側は、自派の支持する共産主義的アナキズムの理論を対置して批判したわけではない。他方、以上の批判に対して『フライハイト』側は理論的な反論を展開せず、またその後『レヴォルテ』側は、議論を続ける重要性を訴えたものの、『フライハイト』に対する理論上の批判をしばらくは展開しなかったようである⁽⁶⁶⁾。

以上の批判がなされていたのと同時期に、ポイケルトは、当時『フライハイト』紙上に掲載されていた自由社会論に対する反論をモストに送り、これを同紙に掲載せよと要請したと思われる。だがこれに対してモストは、まず、ポイケルトが主張する「各人はその欲求に応じて」という原則は「完全に集権的に組織された共同体」においてのみ実現可能であると批判し、また、「労働収益」が搾取されず、平等な教育と高度な技術によって業績が同じになれば、各人の欲求は極めてたやすく充足されうると反論した。次いでモストは、ポイケルトの主張がグロットカウのもの

と基本的に同じだが、ただし後者は「欲求に応じた享受」が行われる「逸樂園 Schlaraffenthum」に、「共産主義政府」や法律、さらには「多数派による支配」などによって「矯正」を加えることを望んでいる、と説明し、さしあたり同様の主張を掲載することは不要だとして、ポイケルトの論説の掲載を拒否した⁽⁶⁷⁾。

だが、その後ポイケルトは、『フライハイ特』紙上に掲載されたある論説が、自分に対して向けられた非難であるとモストに抗議したと思われる。その論説とは、要約すれば次のようなものだった——「共産主義的アナーキズム社会」において完成品はまずそれを作った生産組織に帰属する、と我々は述べた。これを批判する者は、完成品は地球上の全住人に帰属する、と主張する。だがかりにそうだとすれば、生産現場を監視し、完成した生産品を押収する多数の役人が必要であろう。だが我々はそのような官僚機構に反対する。さらに批判者たちは、次のように主張する。完成品がそれを生産した組織に帰属するなら、完成品は「資本」であり、生産者は「資本家」である。それゆえ、非生産者は生産者に従属し、こうして金持ちと貧乏人が生み出される、と。だが、自由社会では、企業家の利潤と卸売業の「ペテン」が廃止され、また人々は生産者としてだけでなく、消費者としても組織をつくって生産者に対抗することができる。さらに自由社会では、品物には「それに通常費やされた労働力」によって価値が付けられ、また品物の交換は、生産組織と消費組織の納入契約によってなされ、他方でこの契約に従って生産が行なわれる。したがって、批判は的外れである、と[12, pp.77-81]。

ポイケルトは、以上の論説が自身に向けられている、さらには、自身の論説を掲載しない、とモストに抗議したようであるが、これに対してモストはまず、この批判はグロツカウにのみ向けられていると説明し、次のように述べた。グロツカウの目的は、アメリカの社会主義運動を分裂させてその一部を社会民主主義派に取り込むことにあった。彼はこれに失敗した上、シカゴで自身が孤立する結果を招いた、と。ただしモストは、歩み寄りをみせるだけでも社会民主主義派からは完全な敗北として受け取られかねないのが現状だと述べ、次のように説明した。——したがって、グロツカウの「ユートピア主義的・世界的・集権的共産主義」と同じ理論を展開するポイケルトの論説を掲載すれば、モストは「危い立場」に追い込まれるのであり、さらには、「全般的な利益」にもつながらないのだ、と⁽⁶⁸⁾。

両者のやり取りを完全に再構成することは、今のところ不可能であり、またモストの手紙からわかるのはわずかな事柄に過ぎない。他方でポイケルトは後年次のように回想している。——手紙の中でモストは、自分がグロツカウに勝利しさえすればよいと述べたが、自分にとって重要だったのは運動全体の問題だった。というのも、モストは集産主義を主張しながら「共産主義的アナーキズム」という語を使用したため、運動が理論上の混乱に陥っていたからである、と[19, pp.206-8]。ただし、当時モストが共産主義と集産主義の違いについて熟知していたとは思われないし、またそれによって運動が混乱していたかは不明である。それゆえ、次のような推測も可能であろう。当時モストにとって何よりも重要だったのは、アメリカの社会民主主義派に対して

対抗していくことだった。他方で彼から見れば、「欲求に応じて」消費するという原則は、アナーキズム社会においてでなく、グロツカウの主張するような「共産主義」においてのみ実現するものでしかなかった。それゆえモストは、敵対するグロツカウと同様の主張を『フライハイ』に掲載すれば、自身ばかりでなくアナーキズム派全体を批判する口実を社会民主主義派に与え、運動に混乱をもたらすと考えた、と。ただし、モストはポイケルトの批判をきっかけにして、次第に共産主義者と自身との相違を明らかにする必要があると考え始めたと筆者は考える。

もっとも84年6月までの段階では、モストはポイケルトの主張、もしくは共産主義的アナーキズムを表立って批判していなかった。その理由は明らかではないが、モストがポイケルトとグロツカウとの主張をほとんど同じものと見なしたためであった可能性もある。いずれにせよ、その後共産主義者は、モストの自由社会論を公開の場で批判しながら自身の見解を明らかにし、その結果両者の対立が表面化することになる。

まず、84年7月、ロンドンで協会が開催した集会の場で『フライハイ』紙上の自由社会論が、主にリンケによって批判され、さらにこの集会の議事録を同紙上に掲載する旨の決議が採択される。だがモストは、当初その掲載を拒否した。ダーヴに対する彼の説明によれば、掲載を拒否した理由は、運動の部外者の間で『フライハイ』派の評判を落とし、同派が内部分裂と混乱を生み出すために活動している人々の集団である、など見なされることだったようである[20, pp. 329ff.]⁽⁶⁹⁾。ここでの運動の部外者という語が、何を意味していたのかは不明であるが、筆者は次のように考える。ポイケルトの論説の掲載を拒否した時にも、モストが重視していたのは、敵対する社会民主主義派と自派との対抗関係であったと推測できる。それゆえ、モストが社会民主主義派を意識し、あるいはそれに対抗するアナーキズム運動の結束を重視して、協会の要請を拒絶したのではないかと。

ただし、ロカーは次のように指摘している。当時ポイケルトがモストを非難する文書をヨーロッパに住む知人に送りつけ、さらにその写しが出回った。モストがそれを読んでいなかったとは言えず、そうだとすれば、こういった行為がポイケルトに対するモストの不信感を高めたであろう、と[20, p.236ff.]。また、モストもダーヴへの手紙の中で、次のように述べている。——ポイケルトは「極めて悪質な人物」である。彼は自身の追隨者を作り上げようとしているが、その目的は有給の編集者の職を作ってこの職に就くことに他ならない。だがこれを『フライハイ』と自分が妨害したので彼は激怒しているのだ、と⁽⁷⁰⁾。

さらに、ポイケルトとモストが相互に抱いた不信感は、ドイツ語によるアナーキズム運動の主導権争いという文脈にも関連させて検討する必要があるだろう。先述したように、84年初頭、『フライハイ』派のアナキストがウィーン郊外で警察の密偵を射殺するという事件が起き、これをきっかけにしてウィーンとその周辺に戒厳令が布かれ、オーストリアではアナキストに対する弾圧が強化される。その影響で、ドイツ語圏出身の多数の亡命者がロンドンに移住して運動に加わった。その中の一人がポイケルトであり、彼はリンケとともに運動の主導権を得ようと

したと思われる[20, pp.193, 218]。他方、すでに83年10月から、リンケはロンドンで月刊紙『レベル *Der Rebell*』（反逆者）の刊行を開始していた。それは一説には、「アメリカ的」になった『フライハイト』に代わり、ヨーロッパで刊行される機関紙を望む声が支持者の間であがっていたためだったという[20, p.229]。しかしながらロカーによれば、『レベル』の刊行に反対する人々もいた。彼らは、『フライハイト』を中心とした活動に一本化し続けるべきだと考えた。というのも、同紙の経営は常に赤字であり、主な資金はアメリカのドイツ系移民による援助からまかなわれていたため、この状況で新たな機関紙を創刊すれば、運動に新たな負担となることは明らかだったからである[20, p.229]。モストの擁護に終始するロカーの説明を全面的に受け入れるわけにはいかないが、『レベル』の刊行が一部の人々によって受け入れられなかった可能性は高い。

こういった運動内部での主導権争いを軸に、ロンドンでは、ポイケルトとリンケを中心としたグループと、モストを支持するダーヴを中心としたグループとの対立が次第に先鋭化していくことになる。協会における自由社会批判に関する記事の掲載を、当初モストが拒否したのは、まず彼がポイケルトらの理論を「アナキズム」と見なさなかったからであろうが、さらにモストの態度は、以上のような、徐々に高まっていた協会内部の対立に起因していた可能性もある。ただし、協会のメンバーでモストが信頼するJ・トゥルクは、何度も「客観的に」議論されたものとモストに説明し、記事の掲載を要請していた[15, p.330; 20, p.237]⁽⁷¹⁾。こういった要請により、モストはこの記事を『フライハイト』に掲載せざるをえなくなったと思われる。では以下で、この記事で展開されるリンケによる自由社会論の批判とそれに対するモストの反論について見ていくことにしたい。

（2）リンケの批判とモストの反論

自由社会論に対する批判が行われた集会は、ロンドンで7月に開催された。主な報告者はリンケであった。さらに、ある出席者が『レヴォルテ』に掲載された『フライハイト』を批判する記事を読みあげたと報じられているが、その詳細は不明である。おそらく先に見た論説が読み上げられたのではないかと推測できる。いずれにせよ、この集会の最後に、集会の議事録を『フライハイト』に掲載することが決議され、さらにこれが同紙の編集部に要請された。当初モストはこれを拒否したが、議事録はようやく9月初めになって同紙に掲載される⁽⁷²⁾。以下ではまず、自由社会論に見られる集産主義的な主張に対して、リンケが共産主義的観点から行った批判を、同紙上に掲載された議事録の中から抜き出して見ていくことにする。

まずリンケは、『自由社会』に収録された論説での、完成品はまずそれを生産した組織のものである、という見解[12, pp.20-2]を次のように批判している。—— 生産手段が社会に帰属するのであれば、自由社会では、生産手段を生産するグループから生産品が社会によって取り上げら

れ、そのメンバーが無産階級となり、他方で消費物資を生産するグループが有産階級になる可能性がある。これに対して我々が主張するアナーキズム社会では、生産手段と消費物資の使用が完全に自由である。これにより、あらゆる支配の芽はつみとられ、同時に各人は全ての物を自分の思い通りに使えるのである。こうすれば、各人は、自分が物を作るのは自分が享受するためであると認識し、その結果、自らの内面に「働きたい」という「衝動」を覚えるはずであり、怠けたりはしないだろう、と。

次にリンケが批判したのは、次のような主張であった。——自由社会では、品物を作るために要した時間が価値を評価する基準となる。したがって、20時間で生産された一着の上着は、10時間で生産された2つの机に相当する価値を持つ。その際、品物の生産に費やされた労働時間に応じて「領収書 *Quittung*」が発行され、これが価値を示すことになる。これが従来の貨幣と異なるのは、時間という尺度によってのみ価値が評価されるという点である、と[12, pp.30-4]。これに対するリンケの批判を要約すれば、以下のようである。——人間には能力や体力の優劣があるため、必然的に諸個人のあいだには生産力の優劣が生じうる。平均より多く生産する「優れた人」は、「劣った人」より多くの「領収書」を受け取り、その結果多くの消費財を入手するだろう。これは、「公正で平等」という自由社会の原則に矛盾するではないか。これに対して、「各人はその能力に応じて働き、その欲求に応じて享受する」という原則を基礎にすれば、体力や能力の優劣が問題となることはないのである、と。

以上の批判は、出来高に応じた賃金に対する批判ともとれるため、的外れのようにも見える。だが、おそらくここで念頭に置かれていたのは、それぞれの生産物についてあらかじめ平均的な価値が算出され、それを基準にした等価交換を実施した場合、同じ時間内でより多く生産した者が、「領収書」もしくは富を蓄積してしまうという事態であろうと思われる。

リンケの批判は以上の点ばかりではなかったが、それらについては後述することにして、以下ではモストが以上のようなリンケの批判に、どのように反論したのかを見ていきたい⁽⁷³⁾。まずモストは、自由社会において製造された生産手段が誰に帰属するのかについて、次のように説明する。生産手段は、まずそれを作った生産者のものであり、消費者の手にはわたった時点で消費者に帰属するが、彼らが使用を開始した時点で初めて社会の共有財産となる、と。つまり、消費財を生産する人々と同様、生産手段を作った人々も、それを所有し続けることが可能だという反論である。

またモストは、能力の違いなどによって不平等がもたらされるという批判に対して、次のように反論した。——子供と大人がそろってできる仕事もあれば、強靱な肉体を持つ者しかできない仕事もある。つまり、それぞれの事情に応じて様々な仕事を選択できるのであるのだから、体力の差など問題にならない。また「不具者」と呼ばれる人々の大半は、今日の「劣悪な教育と極度の搾取」が生み出したものである。これに対して自由社会では、公平な教育がなされ、生産に際していっそう自然力が利用されることによって、多くの人々が同じ業績を達成できるようになる

のである、と。

さらに、各人が「欲求に応じて」消費するという原則と、労働への「衝動」が生産レベルを低下させないという主張に対する反論は、以前に『フライハイ』紙上に掲載された論説においてすでになされているとモストは述べている。この論説は『自由社会』第3版に収録されているものであり、そこでの共産主義者に対する批判を要約すれば、次のようである。——「欲求に応じて」消費するという原則に基づく社会は、実現可能であること、あるいはプロパガンダに有効であることを考慮に入れて構想されていない。これに対して我々が追求するシステムは、今ある資材と人材によって「すぐにも実現可能」である、と[12, pp.100ff.]。さらに、労働時間が価値の基準となる理由は、以下のように説明されている。——まず、出来高や才能などによってではなく、労働時間によって評価することで、あらゆる労働を平等に評価することができる。また、自由社会においては労働時間が極めてわずかなのだから、労働の義務を履行することは苦痛とはならない。したがって、業績をあげることを通じて自分の欲求を充足することは、誰にとっても容易なのである、と[12, p.102]。

以上の反論には、未来社会像が「すぐにも実現可能」だと理解され得るものであり、なおかつプロパガンダに有効なものでなければならないという主張が見られる。これは、未来社会像を描く際にモストが設定していた原則であるように思われるが、これについては検討する必要があるだろう。ただし上述の論説では、労働時間がなぜ価値の基準であるかが説明されたものの、未来社会で労働を義務にするという主張の根拠は示されていない。そこで以下ではまず、この点について検討する。

(3) 労働を義務とする根拠

84年5月、モストはIWPAのセント・ルイス支部が後援する集会で演説し、次のように述べている。——アメリカでは、富の大部分を一握りの金持ちが手に入れ、富を創造している労働者は飢えに苦しんでいる。だが働く者が報酬を得るのは当然である。そして我々は、全世界の富を報酬として要求する。土地、鉱山、工場は、そこで働いて富を創り出す農民、坑夫、労働者のものである。「資本」は、様々なものを創り出す人々の共有財産でなければならない。我々は、聖書の中の「働かざる者、食うべからず」という言葉に同意する。しかしそれと同時に我々は、「働く者は享受せよ」と主張する。これを実現するために我々は、資本とその代表者たちに対抗する組織を必要とするのである、と⁽⁷⁴⁾。

先述したように、これが84年6月に『レヴォルテ』紙上で批判された記事だったが、同様の主張は、モストが1860年代に作った歌詞「労働者」の中にも見ることができる。そこでは、労働者が富を創出し、「金持ち」がこれを勞せずして享受するという構図が描かれ、これによって労働が賛美されると同時に不労所得が非難され、労働する者こそが享受すべきであるという主張が明

示されていた。ロカーによれば、この歌は1920年代になっても、ドイツの労働者の間で歌われていたという[20, p.11]⁽⁷⁵⁾。また「働かざる者、食うべからず」という言葉は、ベーベルが『婦人論』において、社会主義者の基本原則として挙げていたものであり[1, p.151]、さらに当時アメリカで、社会主義者が資本家を非難する際に引き合いに出されていたものでもあった⁽⁷⁶⁾。それゆえ、「働かざる者、食うべからず」は、ヨーロッパでもアメリカでも、一般の労働者の間で支持を得ることができた論理であっただろう。実際、あるシカゴの労働運動の指導者によれば、1870年代にシカゴの社会主義者たちは、社会全体に物資が均等に分配され、「怠け者」が「働き者」のおかげで生きていける「共産主義的」制度に反対していたという⁽⁷⁷⁾。したがって、労働を義務とするという『フライハイライト』側の主張は、当時の社会主義運動や労働運動において、ある程度の説得力をもっていたと筆者は考える。

ただし、同紙上では、自由社会で労働を義務にしなければならない理由が、次のように説明されていた。——人間が労働への欲求を生まれつき持っているわけではない。実際には、いかなる労働も必要悪である。労働がこの世で人間のなすべき務めだとプロレタリアに説くのは、自分は働きもしないブルジョワである。このような考えから解放されている我々は、人生の目的が労働にではなく享受にあるものの、生産しなければ享受できないから労働が必要だと認識している。たしかに人類の誕生以来いかなる社会でも、労働せずに享受したいという衝動は常に存在した。だがその際、仕事をやめていったのは労働をしなくてもよくなった者であり、彼らはそれを埋め合わせるために、労働せざるをえない者に対して仕事を倍にして与え、その際に策略と暴力を最大限に用いてきたのだ。だから、いずれ革命が達成されても、これまで通り、人は石炭採掘よりも慰安旅行を、仕事場よりも劇場を、すり減ったかかとをなおすよりもおもしろい本を読む方を好むだろう。だから、労働が義務でなければ、労働意欲はすぐにゼロになるだろう、と⁽⁷⁸⁾。

つまりここでは、人生の目的は労働にではなく享受にこそあると主張され、義務としての労働は美德としてでなく、「必要悪」として論じられているのである。このような考え方が、当時の労働者の間で一般的だった考えとどのように一致し、あるいは異なっていたかについては、ここでは検討できないが、労働を義務化しなければならないという『フライハイライト』側の主張は、『自由社会』における、次のような論理からも導き出されたであろう。——生産活動からあらゆる「不愉快さ」を取り去ることは不可能であるから、個人の「好み」や「欲求」を最大限に充足させるのは「消費」なのである、と[12, p.7]。つまり、モストラは、労働から苦痛を除去できないという前提から出発していたため、労働を義務にしなければ、働く者がいなくなると主張したと考えられるのである。それゆえ彼らは、「欲求に応じて」消費するという原則を、現実性に乏しいものだと非難したのである。

以上、労働を義務にすることをモストラが主張し得た論理とその背景について検討してきた。他方で、すでに述べた点であるが、『自由社会』においては、「すぐにも実現可能」であるか、あるいはプロパガンダに有効であるかということを考えていないという理由で、「欲求に応じて」

消費する未来社会像は「空中楼阁」を描いたものに過ぎないと非難されていた。逆に言えば、ここで示されているのは、プロパガンダに有効であり、なおかつ「すぐにも実現可能」であることこそが、未来社会像を描く際の原則だという見解であろう。以下では、こういったモストによる主張が意図していたものが何であったかについて検討していきたい。

(4) 未来社会像を描く目的

先述したように、リンケは自由社会論に見られる集産主義的な特徴を批判したが、彼の批判はさらに、革命後の社会で労働できない人々が「相互保険機関」によって、労働できる者と同じ生活を保証されるという構想[12, pp.49ff.]に向けられ、これに加えてリンケは、革命勃発直後に臨時の「革命諸委員会」が組織されて、それぞれの任務を遂行するという主張[12, p.72]を、以下のように批判した。—これまでの革命において、このような「諸委員会」が自分たちの利害だけを追求したため、反革命がもたらされたのである。アナーキズムは、このような過ちを認識しているがゆえに、他の思想に比べて優れている。過ちをくりかえさないためには、各人がそれぞれの職場の友人と組織を結成することの方が重要であり「委員会」など不要なのだ、と。これに対して、モストは次のように反論している。—「養老施設」や「諸委員会」等が必要であるかどうかは、未来の人間にとっての問題である。我々は彼らのために規則を作ろうとしているのではなく、ただ推測を述べたまでである。我々は「予言者」でも「独断論者」でもないのだ、と。

つまり、未来社会像の細部に関して現時点で議論しても、それが実現されるかどうかはわからないのであるから、そういった議論はほとんど意味がないという主張であり、これは従来なされてきたものである。ただしこの主張は、モストがポイケルトへの手紙の中で示した、次のような見解によって補われるべきであろう。—こういった論説は、我々の原理が実行された場合に起こりうることを、具体化し、かつわかりやすくするためだけのものである。しかも通常それは「実践」によって修正されるものである、と⁽⁷⁹⁾。つまり、ここで示されているのは、プロパガンダに有効であることが重要だが、革命が勃発した後は、それ以前に描かれた未来社会像は簡単に「実践」によって書き換えられうるという見解である。

また、この手紙が書かれた直後、『フライハイト』紙ではアナーキストの「理想」に関して、次のように主張される。—現実の諸状況に基づいて「すぐにも実現可能な」社会像を描き、その後起きることは後の世代に委ねる人々がいる一方で、完成された社会を構想しながらも、それが実現される根拠が存在するかは考慮しない人々がいる。以上の両極端の間には様々な「仮説」がありうるとはいえ、後者のように「空想 Phantasien」を現実だと思い込むことは、アナーキズム全体に悪影響を及ぼす。むしろ、我々の同時代人に深い印象を与えるような、わかりやすい説明を通じて議論することこそが、アナーキズムが支持を得る最も簡単な方法である。他方、自分たちの「空想 Utopisterei」だけが正しいと主張し、これを全ての人間に強制しようと考

る人々がいるが、これはアナーキズムの原理に反する。これに対して、自由社会論において我々は、それが実現される可能性を論じたに過ぎなかったのである、と[12, pp.96-8]。つまり、まず「仮説」に過ぎない未来社会像を唯一正しいものとして他人に強制することはできず、しかもそれは同時代人に理解されるものでなければならぬと主張されていたのである。

さらに、翌85年6月に掲載された論説では、要約すれば次のように主張されていた。——最良のものは「事実」に基づいて作られる。それゆえ我々は、所与の「事実」に基づいて論理を構築する。今日の社会はもはや存続できないが、その権力者がすすんでこの制度を廃止もしくは改善しようとは望まない。この「事実」を基礎に未来を構想するため、我々は社会革命を準備し、既存の圧政を廃棄しようとする。他方、今日の技術の発展は共有化された手段による生産を促進する、という「事実」がある。我々はこれに基づいて、「共産主義」を受け入れる。ただしこれまでの経験から、集権主義的に組織された共産主義社会が自由を抑圧するのは明らかである。それゆえ我々は「連合主義」を支持するが、他方では、その完結した形をあらかじめ定めたいとは思わないため、「最終的目標」を持たないのである。我々は所与の条件に基づいてさしあたり実現可能なものを追求し、その後のことはさらなる「実践」に委ねる。このように我々は、「事実」に基づいて議論するため、自説に固執する独善家ではなく、文字どおりアナキストなのである、と⁽⁸⁰⁾。

以上の主張で明らかにされているのは、同派にとって未来社会論を論じる際の原則であると解釈できる。それに従えば、未来社会像は「事実」に基づく、さしあたり実現可能なものとして描かれるべきであるという。これと似通った主張をモストは、78年に発表した論文の中で展開している。彼はその二年前に発表したパンフレットの中で、社会主義国家において家事や育児から女性が解放されると主張したが⁽⁸¹⁾、これが後に批判を受けたと思われる。これに対してモストは、当時見られた水道や集中暖房、ガスによる照明、洗濯施設、共同食堂や幼稚園を例に挙げながら、次のように述べた。——こういった「所与の事柄」に基づいて、その発展がもたらす帰結を推定することに対して、「ユートピア主義者」という非難は的外れである、と[10, p.37-9]⁽⁸²⁾。

つまりモストは、「現実」にその端緒があれば、それらを根拠にしてありうべき未来を描くことは許されると主張したのであり、ここには、その後『フライハイ』紙上でなされた主張と同じ特徴が見られる。他方、「相互保険機関」などに対する批判に対してモストは、これらの提案に固執するつもりはないと述べていたが、その論拠は、こういった事柄が、未来社会におけるさらなる「実践」に委ねられ、修正されうるから、というものだったのであろう。

以上のような主張を、未来社会像を描く際の原則として解釈すれば、モストらが重視していたのはプロパガンダだけでなく、「実践」の場としての来るべき革命の勃発であったのではないかと推測できる。この点を示唆しているのは、84年9月に『フライハイ』に掲載された論説である。そこでは、アナキストや社会民主主義者たちによる架空の討論が描かれ、彼らの見解に一致点が見られずに「混乱」している様が、次のように風刺されていた。まず最初にアナキスト

たちが登場し、その中で『リバティー』は、「共産主義」を主張するという理由から、他方で『レヴォルテ』は、十分に「共産主義的」ではないという理由から、ともに『フライハイ』が「アナキズム的」でないと批判する。次いで、目指すべき未来社会像をめぐる社会民主主義者たちが対立している状況が描かれる。まずグロットカウがアナキズムを非難するが、「理性的な」アナキズムが目標だと述べる社会民主主義者もいる。他方エンゲルスは、国家は「廃止」されるのではなく「眠りこむ」のであるから「アナキスト」は間違っていると述べる。これに対してドイツの社会民主主義者W・ハーゼンクレーファーは、国家を存続させ、これを「教育」して「道徳的に」その性格を高めるのが自分たちの要求だと反論するが⁽⁸³⁾、ペーベルは、未来社会に国家はなく、存在するのは「自由な協同組合」だけだと主張する。この後さらに、社会民主主義派のリーダーたちが様々な主張を展開するが、最後にロックアウトされた一人の坑夫が登場し、「俺は腹が減った」と怒鳴って議論に終止符が打たれる。次いで、この論説の筆者は次のように主張する。——「これが核心だ」と我々は言おう。「学者」連中が未来像について意見を一致させるまでには、窮乏化した大衆の堪忍袋の緒はとくに切れているのだ。「重要なのは、全面的社会革命に向けての闘争と計画、そして準備である」と⁽⁸⁴⁾。

つまりここでは、未来社会像をめぐる対立することは、革命の勃発に向けた運動に有益でないと主張されているのである。ここから、『フライハイ』派が来るべき革命を最も重視していたことが明らかなのであるが、さらに次の事実は重要であろう。まず先述したように、当時モストはダイナマイトの製造や使用の方法を学び、ヨーロッパに密輸するという計画を明らかにし、その際彼は、ヨーロッパが革命運動の「前線」であるという認識を示していた。さらに、翌85年の初頭から同年6月終わりまで、モストは『フライハイ』紙上に、ダイナマイトや爆弾などの製造法を解説する記事を連載する。そして同年7月初頭、これらがパンフレット『革命兵学』⁽⁸⁵⁾にまとめられて出版される。ここでは詳述できないが、同書の内容と、83年から85年までにドイツ語圏で多発した、主としてアナキストが起こした殺人や爆破事件、およびそれを報じた『フライハイ』紙上の記事を見れば[24, pp.103-5]、『革命兵学』が、そのような事件を教訓にしなが、間近に迫った革命の勃発に向けて準備することを訴えるために刊行された、という側面があると指摘できる[25, pp.352ff.]。

ただし、そのような事件だけを根拠にして、すぐさま革命が勃発すると主張されていたわけではない。それまで『フライハイ』紙上で示されてきた革命観に従えば、様々な「行動」は、革命勃発の前提を成す大衆の「反逆の精神」を覚醒する効果を持ちうるものと規定されていた。それゆえ、ドイツ語圏で起きた様々な事件が、そのような「行動」と見なされていた可能性は極めて高いのである[25, pp.343-5, 350ff.]。これに加えて、86年初頭までに『フライハイ』紙上では、世界各地で発生していた暴動やストライキが報じられ、革命の勃発が間近かであるといった主張の論拠となっていた[25, pp.353ff.]。

他方モストらは、そういった様々な事件に、革命勃発の兆候だけでなく、連合主義に基づく理

想社会の端緒も読み取れると主張していた。例えば『フライハイ』紙上では、フランスで工場占拠事件が起きた際、次のように論じられた。——革命が勃発すれば、従来のバリケード戦に代えて労働者が採用する戦術は、工場や住宅の占拠および接収である。住宅や工場の「社会化」は、戦闘における戦術としてだけでなく、蜂起した人々を「アナキー」の中に置き換えるためにも有効に機能するのである。労働者たちが、工場で「自由な生産グループ」を組織すれば、「主人のいない仕事場や工場」が「自由な社会における自由な組織の基礎」となるだろう、と[25, p.355]⁽⁸⁶⁾。

つまりここでは、実際に起きた事件に基づいて、革命勃発に際して採用されるべき戦術と、未来社会において採択されるべき生産組織のモデルが描かれたのである。他方、こういった組織が革命勃発以降にしか結成されえなと考えられていたわけではない。例えばモストはある労働組合の集会で、労働組合が来るべき革命において「闘争体」として行動するだけでなく、革命後に「生産を組織化するための中核」となると主張していた⁽⁸⁷⁾。つまり彼は、現存する労働組合には、革命勃発直後に自由社会を形成していく能力があると主張していたのである。

したがって、自由社会論は革命が間もなく勃発することに対する期待と密接に結びついていたと筆者は考える。他方で、モストらが革命に向けて支持者を確保していくためには、一般の人々に理解されうる未来社会像を、「事実」に基づいて描く必要があったであろう。したがって、「働かざる者、食うべからず」という理念を労働者たちが共有しているとモストらが認識していたために、この原則が自由社会論に組み込まれる一方、共産主義が非難された可能性は高いのである。ただし、86年5月にシカゴでヘイマーケット事件が発生してアメリカのアナキズム派に対する弾圧が開始されたことなどによって、『フライハイ』派を取り巻く思想や運動の状況は大きく変化したと思われる。これらの状況と同紙上で86年以降に展開された主張に関する詳細は、別の機会に考察することとしたい。

おわりに

以上見てきた通り、自由社会論は、未来社会像を詳細に描くことを重視しないというそれまでの方針をあえて逸脱しながら、時代による様々な要請にモストらが答えることによって生み出されたと言える。ただし『フライハイ』派が強調したのは、未来社会像が、すぐにも実現可能でプロパガンダに有効でなければ意味を成さないという点であった。以上の主張の前提となっていたのは、まず、実現の端緒が実際にあれば、それに基づいて未来社会を描くことは可能だという、1870年代以来ドイツの社会民主主義者の間で知られていた考え方であっただろう。またこの考えには、現時点での支持を得るためには、大多数の人々が理解できる未来社会像を描く必要があるという論理が結びついていたのではないかと筆者は推測する。ただし1880年代においては、すぐ

にも実現可能な未来社会像を描くべきだという主張の根拠は、革命の勃発が間近であるという認識にもあったと考えられる。

以上のような未来社会を描く際の原則に基づいて、モストは共産主義者を批判したのだが、ただし、その後彼の見解には変化が見られる。実際ネットラウは、88年頃からモストが共産主義を支持するようになったと指摘している[15, p.168; 16, p.214]。たしかに同年初頭から、『フライハイ特』紙上にクロポトキンの論説が他紙から転載され始める[16, p.6]⁽⁸⁸⁾。しかし、それらの論説においては集産主義があからさまに批判されていたわけではなく、「集産主義的賃金制度」に対するクロポトキンの批判が掲載され始めるのは、むしろ90年の半ばからである⁽⁸⁹⁾。したがって、同派の集産主義から共産主義への移行が明確に示されたのは、この時期ではなかったかと筆者は考える。

このような見解の変化がどのような経緯で始まったのかは、今のところ不明である。モストは96年に、かつては集産主義に基づく社会を構想していたが、クロポトキンの著作を読んだ後、共産主義的アナキストになったと述べている[15, p.156]⁽⁹⁰⁾。だが、運動の共有財産と見なされていたはずの『フライハイ特』紙が共産主義に転換したという事実を、モスト個人の決断、もしくは彼の思想転換だけで説明してよいかは疑問である。それでは、リンケらと対立してから数年後に同派が共産主義へと転換した理由は何だったのか。筆者はそれを、『自由社会』における主張そのものに見出すことができると考える。以下で、この点について検討しておきたい。

まず『自由社会』では、労働から苦痛を取り除くことができないう前提され、人生の目的が労働にではなく享受において実現されると述べられていた。また『フライハイ特』紙上では、人間が労働への意欲を常に持ち続けることはできないため、アナキズム社会においても、労働を義務化する必要があると主張されていた。これに対し、クロポトキンの主張は全く異なる。彼によれば、労働を人間にとって快いものにするこは、労働環境の整備などによって実現可能である[7, p.144-55]。

だが、すでに述べたが、モストは消費が個人の好みに応じた無制限のものであり、享受が各自の意志と欲求に合致したものでなければならぬと主張していた。彼はそのような消費を可能とする前提、すなわち技術や生産・流通システム等が実際に存在し、これが最小限の労働によって最大の富を得ることを可能とさせると述べているが、クロポトキンの見解もこれと似通っている[7, pp.20, 118; 12, p.7]。さらにモストは、消費されない大量の生産品がありながら、労働者が悲惨な状況にあると指摘し、重要なのは欲求の充足をはばむ障害を除去し、生産と人間の欲求とを調和させることだと主張する[12, p.8]。このようなモストの主張は、人間の欲求に見合う消費を最大限に追求するという点で、「欲求に応じて」消費するというクロポトキンの見解と共通性を持っていたと言える。それゆえ、労働が人間にとって快楽となるというクロポトキンの主張を承認しさえすれば、84年の時点でも、モストが共産主義を支持する可能性はあったと筆者は考える。

他方、クロボトキンが労働を義務にすることに完全に反対していたとは断定できない。たしかに彼は、「怠け者」とは悪質な労働環境や労働条件等々が原因で労働意欲を失った人々であるのだから、重要なのは怠惰の原因をなくすことであり、そうすれば、労働を嫌う者などほとんどいなくなると主張している[7, p.195-9]。しかし他方でクロボトキンは、アナーキズム社会で「怠け者」が完全にいなくなると断言していたわけでもなく、かりに「怠け者」が現われれば、彼らはそれまで帰属していた団体などから除名されるとも述べていた[7, pp.190-3]。つまりクロボトキンは、共産主義社会で労働に参加しないことを反社会的行為と見なすという見解も示していたのである。それゆえ、彼の主張を『フライハイ』派が受け入れる余地はあったと筆者は考える。以上のように、初めからクロボトキンの主張に連なる特徴が同派の主張にあったという事実は、リンケら共産主義者と対立してから数年後に『フライハイ』派が共産主義的アナーキズムを受け入れたことを、完全にではないにせよ、ある程度までは説明できるのである。

ネットラウによれば、その後同派が共産主義を支持する頃までには、ヨーロッパ各地で共産主義派が台頭し、さらに彼らの間で共産主義が「教義」と見なされるようになる。これが具体的にはどのような事態であったのかは、ここでは逐一検討できないが、本稿で見た自由社会論をめぐる共産主義者とモストラ『フライハイ』派との論争は、その一つの例と見なすことができるだろう。ただし80年代の終わり頃には、集産主義者と共産主義者との理論上の対立を終結させようとする見解が示され始める。例えばイタリア出身のアナーキストE・マラテスタは89年に、将来の社会組織は共産主義を基礎とすると明言する一方、共産主義者と集産主義者が「全くの仮説」のために分裂するのは好ましくないと述べていた[16, p.152]。他方スペインでも同年に、F・タリダが次のように主張した——完全な社会解放を要求し、「自然、科学、公正」の原則に合致し、あらゆる教義を排除する革命理論は全て「形容詞抜きのアナーキズム *la Anarquia sin adjetivos*」である。また、「アナーキー」という基本原則に比べれば経済システムは二義的であり、それをめぐって運動を分裂させてはならないのである、と。さらに20世紀初頭になると彼は、「アナーキズム」という呼称自体を放棄して、すべての教義を否定するという見地から、「自由な社会主義 *el socialismo libertario*」という名称を提案する[6, pp.136-9; 16, p.122-5]。

以上のような主張は、いかなる理論も革命とその後の社会における実践に移されない限り「仮説」でしかない、という本稿で見た『フライハイ』紙上での主張と共通性を持っている。たしかにポイケルトらから見れば、自身の主張が最も優れたものであるとするモストの自由社会論は、排他的なものにしか見えなかったであろう。だが、この点を確認しながらも、85年6月の『フライハイ』紙上で示された、以下のような見解にも注目しておきたい。——アナーキストといえども利己主義に毒された社会で育っているのだから、当初は自由社会で対立が生じるのは当然である。だから、そこでは各人が「友愛の感情をこめた言葉」によって、過ちと弱点を明らかにして相互に向上を目指さねばならない、と。さらにこの論説の執筆者は、こういった行為を、現存する全てのアナーキスト・グループが共同の作業を通じて実践する必要があると主張する。それ

はまず、「模範」を示して支持者を獲得するためであるが、さらに重要な理由は、来るべき革命で勝利するためには、諸勢力が結合しなければならないからであるという。これに加えて、この執筆者は次のように注意を促している。——アナーキストが口にする「自律」や「個人の自由」という語は、必ずしも「孤立」を意味しているわけではないし、ましてや同志の間に対立をもたらすことなどではないのである、と⁽⁹¹⁾。

以上の主張が、いかなる状況を意図してなされたかは今のところ不明であるが、『フライハイト』派が、運動の内部で対立する人々に対して、アナーキスト諸派による「連合」を実践せよと訴えていたのではないかと筆者は推測する。さらに、国家の廃止や暴力革命という点で一致するのであれば、社会民主主義者との共闘も辞さない、という、その後モストによって示された見解は⁽⁹²⁾、唯一の正しさを誇示するリンケら共産主義者とは異なっていたのではないかと筆者は考える。したがって、『フライハイト』派がクロボトキンの主張を受け入れて共産主義を主張したと言うのでは不十分なのであり、両者の主張や活動の細部に関して、今後検討する必要があるだろう。

さらに、当初は多様なユートピアの共存を認める発想がアナーキストたちの間にあったにもかかわらず、80年代に入って共産主義を唯一の原理とする主張が、ある種の正統性を獲得した背景に関する検討が今後不可欠であろう。本稿で筆者は、例えば、既存の体制における改革を指す「集産主義」や「国家社会主義者」、あるいはエンゲルスらによる主張が、アナーキストたちにあらためて自身の理念を明確化させるきっかけとなった可能性がある指摘した。共産主義的アナーキズムの台頭という現象は、こういった当時の全般的な思想状況という文脈と関連させながら、今後検討していく必要があるだろう。世紀末のヨーロッパやアメリカにおいて、アナーキズムが少なからぬ支持を得たのはなぜか、という問題は、こういった文脈を解明し、再構成することによって明らかにすることができると筆者は考える。

省略記号一覧

Bulletin = *Bulletin de la Fédération jurassienne de l'Association internationale des travailleurs*

FR = *Freiheit*

GG = *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*

IWK = *Internationale Wissenschaftliche Korrespondenz zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*

LBY = *Liberty*

MEGA = *K. Marx / F. Engels, Gesamtausgabe*

MEW = *K. Marx / F. Engels, Werke*

RVT = *Le Révolté*

SD= *Der Sozialdemokrat*

参考文献・資料一覧

手稿と新聞および1880年代までに刊行された文献名には、以下の所蔵機関名およびコレクション名の省略記号を記す。

[CMC]= Carl Menger Collection (一橋大学社会科学古典資料センター、カール・メンガー文庫)

[EB]= Paul Eltzbacher Bibliothek (大原社会問題研究所、エルツバッハー文庫)

[HUL]= Hitotsubashi University Library (一橋大学附属図書館)

[IISG]= Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis (アムステルダム国際社会史研究所)

[OISR]= Ohara Institute for Social Reserch (大原社会問題研究所)

[TULE]= Tokyo University, Faculty Library of Economics (東京大学経済学部図書館)

A、手稿 (手紙)

Most an Dave: 8.7.1884-29.4.1886, in: Archiv Dave. Portefeuille 4 [IISG]

Most an Peukert: 13.3-19.8.1884, in: Archiv Peukert :Correspondenzen [IISG]

B、新聞 (発行地等の詳細は、本稿で扱った期間のみを記す)

Bulletin de la Fédération jurassienne de l'Association internationale des travailleurs, 15.2.1872 - 1.5.1873 Sonvillier; 15.5.1873 - 6.6.1875 Le Locle; 13.6.1875-28.11.1875 Sonvillier; 5.12.1875 - 25.3.1878 La Chaux-de-Fonds, rpt. Milano n.d. [HUL]

Freiheit, 1.4.1879 - 21.8.1880 London: Organ der Sozialdemokratie; 28.8.1880 - 26.3.1881 London [副題なし]; 12.4.1881 - 3.6.1882 London [副題なし]; 8.7. - 7.10.1882 London [実際の発行地はスイス] [副題なし]; 14.10. - 18.11.1882 Exeter [実際の発行地はスイス。副題なし]; 9.12.1882 - 27.6.1885 New York: Organ der revolutionären Sozialisten; 4.7.1885 - 19.6.1886 London und New York: Internationales Organ der Anarchisten deutscher Sprache. [EB] [IISG]

Liberty, 6.8.1881-16.4.1892 Boston, rpt. Westport 1970. [IISG] [OISR]

Le Révolté, 22.2.1879-17.2.1884 Genève: Organe socialiste; 2.3.1884 - 16.3.1884 Genève: Organe anarchiste; 30.3.1884 - 14.3.1885 Genève: Organe commuiste-anarchiste. [EB]

Der Sozialdemokrat, 28.9.1879 - 26.9.1880 Zürich: Internationales Organ der Sozialdmokratie deutscher Zunge; Zürich 3.10.1880 - 28.10.1886: Zentral-Organ der deutschen Sozialdemokratie, rpt. Berlin 1970. [HUL]

C、類出する文献（本文中もしくは註で[7, p.1]と示されれば、それは文献番号[7]に最初に挙げられた文献の1頁を意味する。以下に挙げられていないものは註を参照。）

- [1] A. Bebel, *Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft*, Hottingen-Zürich 1883. [TULE]
- [2] C. Cahm, *Kropotkin and the Rise of Revolutionary Anarchism 1872-1886*, Cambridge 1989.
- [3] A. Carlson, *Anarchism in Germany, I: The Early Movement*, Metuchen 1972.
- [4] *Discussion über das Thema: "Anarchismus oder Communismus?" Geführt von Paul Grottkau und Joh. Most, am 24.Mai 1884 in Chicago*, Chicago 1884. [TULE]
- [5] P. Eltzbacher, *Der Anarchismus*, Berlin 1900 (若山健二訳『無政府主義論』、初版、1920年、復刻版、黒色戦線社、1991年)
- [6] G. R. Esenwein, *Anarchist Ideology and the Working-Class Movement in Spain, 1868-1898*, California 1989.
- [7] P. Kropotkin, *The Conquest of Bread*, London 1906, rpt. Montréal/New York 1990 (長谷川進訳「パンの略取」『クロボトキンⅡ』三一書房、1970年、3-208頁)。
- [8] P. Marshall, *Demanding the Impossible. History of Anarchism*, London 1993.
- [9] J. Martin, *Men against the State. The Expositors of Individualist Anarchism in America, 1827-1908*, Dekalb 1953, rpt. Colorado Springs 1970.
- [10] J. Most, 'Der Socialismus und die häuslichen Arbeiten'; *Die Zukunft*, 2.Jg. Heft 1/2, 15. Oktober 1878 [CMC], pp.33-49.
- [11] ----, *The Beast of Property. Total Annihilation Proposed as the only Infallible Remedy. The Curse of the World which Defeats the People's Emancipation*, New Heaven, 2.ed., n.d. [1884?]. [HSG] ('The Beast of Property 1884', in: *Socialism in America. From the Shakers to the Third International. A Documentary History*, ed. A. Fried, New York 1970, pp.213-20.) 本書のドイツ語版の初版を入手できないため、本稿では上記のものを利用した。同書は83年にニューヨークで刊行されたドイツ語版の初版からの英訳である。この版では未来社会論が後半で展開されているが、87年に再刊されるドイツ語版にはその部分がない。Cf. J. Most, *Die Eigenthumsbestie. Internationale Bibliothek No.6*, New York 1887. [EB]
- [12]----, *Die Freie Gesellschaft. Eine Abhandlung über Principien und Taktik der kommunistischen Anarchisten. Nebst einem polemischen Anhang*, New York 1884. (2. Aufl. [CMC]; 3. Aufl. [HSG]).
- [13] M. Nettlau, *Bibliographie de l'Anarchie*, Bruxelles / Paris 1897, rpt. Glashütten im Taunus 1976.
- [14] ----, *Der Anarchismus von Proudhon zu Kropotkin*, Berlin 1927, rpt. *Geschichte der*

Anarchie, Bd. II, Vaduz 1984; ed. H. Becker, Münster 1993 (新居格訳『無政府主義思想史』世界大思想全集、35、春秋社、1930年)。

[15] ----, *Anarchisten und Sozialrevolutionäre*, Berlin 1931, rpt. *Geschichte der Anarchie*, Bd. III, Vaduz 1984; ed. H. Becker, Münster 1993.

[16] ----, *Geschichte der Anarchie*, Bd. IV: *Die erste Blütezeit der Anarchie: 1886-1894*, ed. Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis Amsterdam, Vaduz 1981.

[17] ----, *Geschichte der Anarchie*, Bd. V: *Anarchisten und Syndikalisten Teil 1*, ed. Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis Amsterdam, Vaduz 1984.

[18] ----, *A Short History of Anarchism*, ed. H. Becker, London 1996 (本書のイタリア語版からの邦訳は以下を参照。上杉聰彦訳『ネットラウ』三一書房、1970年)。

[19] J. Peukert, *Erinnerungen eines Proletariers aus der revolutionären Arbeiterbewegung*, Berlin 1913.

[20] R. Rocker, *Johann Most. Das Leben eines Rebellen*, Berlin 1924 / 1925 (Nachtrag), rpt. Glashütten im Taunus 1973; ed. J. Schmück, Köln / Berlin 1996.

[21] D. Stafford, *From Anarchism to Reformism. A Study of the Political Activities of Paul Brousse within the First International and the French Socialist Movement 1870-90*, London 1971.

[22] A. Staudacher, *Sozialrevolutionäre und Anarchisten. Die andere Arbeiterbewegung vor Hainfeld. Die Radikale Arbeiter-Partei Österreichs (1880-1884)*, Wien 1988.

[23] 山中ひかる『「フライハイ」紙の主張の変遷』『一橋論叢』1994年8月、379-98頁。

[24] ---- 『「革命的少数派」としてのアナーキズム運動』、下村由一・南塚信吾共編『マイノリティと近代史』彩流社、1996年、93-115頁。

[25] ---- 『「フライハイ」紙に見られる革命観』『一橋論叢』1996年8月、340-56頁。

[26] ---- 『「共産党宣言」とアナーキズム』『共産党宣言 — 解釈の革新 —』篠原敏明・石塚正英編、御茶の水書房、1998年、249-82頁。

[27] 渡辺孝次『時計職人とマルクス——第一インターナショナルにおける連合主義と集権主義』同文館、1995年。

註

(1) 例えば以下の文献を参照。大澤正道『アナキズム思想史』増補改訂版、現代思潮社、1967年。G・ウドコック／白井厚訳『アナキズム』I・II、紀伊國屋書店、1968年。A・アルヴォン／左近毅訳『アナキズム』白水社、1972年。J・ジョル／萩原延壽・野水瑞穂訳『アナキスト』岩波書店、1975年。P. Lösche, *Anarchismus*, 2. Aufl., Darmstadt 1987.

(2) 19世紀の代表的アナーキストとして今日知られているのは、P・J・ブルードン、M・バクーニン、およびP・クロボトキンであろう。だが当時の人々が現代と同様に彼らの思想を十分に知ることができ、その結果彼らがアナーキズムを支持したと考えるのは危険である。例えば、『神と国家』は76年に死去したバクーニンの代表作の一つと見なされるが、その単行本は、フランス語によるオリジナル版がジュネーヴで82年に、最初の英語版がボストンで83年に、最初のドイツ語版がフィラデルフィアで84年に刊行されたに過ぎない[13, p.46]。

(3) E. V. Zenker, *Der Anarchismus*, [Jena] 1895, rpt. Frankfurt 1966, pp.155ff.; M. Nettelbladt, 'John Most', *Freedom*, 1906, p.14; E. Drahn, *Johann Most. Eine Bio-Bibliographie*, Berlin 1925, p.12; F. Trautmann, *The Voice of Terror. A Biography of Johann Most*, Westport/London 1980, p.xxii.

(4) H. M. Bock, 'Anarchosyndikalismus in Deutschland. Eine Zwischenbilanz', *IWK*, 1989, Heft 3, pp.293-358; H. M. Bock, 'Anarchosyndicalism in the German Labour Movement: A Rediscovered Minority Tradition', in: *Revolutionary Syndicalism. An International Perspective*, ed. M. v. d. Linden / W. Thorpe, Worcester 1990, p.59-99; H. Rübner, *Freiheit und Brot. Die Freie Arbeiter-Union Deutschlands. Eine Studie zur Geschichte des Anarchosyndikalismus*, Berlin/Köln 1994; D. Nells, 'Syndikalismus und Unionismus - Neuere Ergebnisse und Perspektiven der Forschung', *IWK*, 1993, Heft 3, pp.348-56.

(5) T. Nipperdey, *Deutsche Geschichte 1866-1918, II: Machtstaat vor der Demokratie*, München 1995, p.353.

(6) J. Guillaume, *L'internationale. Documents et Souvenirs (1864-1878)*, t. 1, Paris 1905, p. 75.

(7) [A. Schwitzguébel], *La question des services publics devant l'Internationale (Rapport présenté au Congrès jurassien tenu à Vevey, les 1^{er} et 2 août 1875, par la Section des graveurs et guillocheurs du district de Courtelary)*, [Neuchâtel 1875][EB], pp.12ff., 22. J. GuillaumeとA. Schwitzguébelに関しては、cf.[25, pp.59ff., 169註(47)]。

(8) F. Dumartheray, *Aux Travailleurs manuels. Partisans de l'action politique*, Genève 1876 [EB], p.14.

(9) *Bulletin*, 3.12.1876. イタリア連合内部において共産主義が支持される経緯に関しては cf. N. Pernicone, *Italian Anarchism. 1864-1892*, Princeton 1993, pp.111-5.

(10) 『レヴォルテ』紙に関しては、P・クロボトキン著／高杉一郎訳『ある革命家の手記』(下) 岩波書店、1979年、231-9頁も参照。

(11) 'Association internationale des travailleurs. Réunion générale de la Fédération jurassienne', *RVT*, 18.10.1879.

(12) 'Idée anarchiste au Point de vue de sa Réalisation pratique', *RVT*, 1.11.1879.

- (13) 'La Commune de Paris', *RVT*, 20.3.1880; P. Kropotkin, *Paroles d'un Révolté*, Paris 1885, rpt. Paris 1978, p.105 (三浦精一訳「叛逆者の言葉」『クロボトキン I』三一書房、1971年、90-1頁)。
- (14) Cf. 'Association interationale des travailleurs. Fédération jurassienne', *RVT*, 17. 10. 1880.
- (15) [A. Schwitzguébel], *Programme socialiste. Mémoire présenté au Congrès jurassien de 1880 par la Fédération ouvrière du district de Courtelary*, Genève 1880 [EB], pp.13ff., 23ff. Cf. 'Kollektivistisches Programm. Denkschrift, die Arbeiterföderation des Distrikts Courtelary dem Jurakogreß von 1880 unterbreitete', in: *Der Anarchismus*, ed. E. Oberländer, Olten/Freiburg 1972, pp.200ff., 208ff.
- (16) 'Le programme électoral des socialistes français'; 'Mouvement social', *RVT*, 24. 7. 1880.
- (17) ルクリュは、自治体が将来の社会の中心になると捉えられかねないという点でも綱領案を批判し、「自治体主義者 communaliste」と一線を画して「コミューン」を再定義した[2, p.51; 14, p.306]。
- (18) 'Anarchie et Communisme. Résumé du discours prononcé par le Comp. Cafiero au Congrès de la Fédération jurassienne', *RVT*, 13.11., 27.11.1880.この演説は1890年代以降、ドイツ語をはじめとして数か国語に翻訳されている[13, p.123ff.]。
- (19) ルアーヴルで開催された社会主義者の会議において、R・カーンは「自由共産主義 *communisme-libertaire*」という語で共産主義的アナーキズムを表現したが、この語の方は普及しなかったと思われる[15, p.12]。
- (20) J. Most, *August Reinsdorf und die Propaganda der Tat*, [New York]1885 [EB], p.26.
- (21) Cf. U. Linse, *Organisierter Anarchismus im Deutschen Kaiserreich von 1871*, Berlin 1969, p.126. 社会主義者鎮圧法が施行されるきっかけとなった二度のドイツ皇帝暗殺未遂事件のうち、最初の事件を起こした犯人M・ヘーデルも、ヴェルナーおよびラインスドルフと関係を持っていたと思われる[3, pp.118ff.]。
- (22) J. Most, 'Die "Freiheit"', *FR*, 4.7.1896.
- (23) H. Becker, 'Johann Neve (1844-1896)', *The Raven*, August 1987, p.106-8; H. Becker, 'Johann Most in Europe', *The Raven*, March 1988, p.298ff.
- (24) モストは論説が掲載されていた時期に演説旅行に出かけていた。Cf. 'Internat. Arbeiter Assoziation', *FR*, 26.4., 3.5., 10.5., 17.5., 24.5., 31.5., 7.6., 14.6., 28.6., 5.7., 12.7.1884. ただしポイケルトへの手紙からは、モストが旅先から論説を書き送っていたことが推測できる。例えば次の手紙はシカゴから発送されていた。Cf. MS. Most an Peukert, 21.7.1885.
- (25) 'Organisation und Verwaltung beim Communismus', *FR*, 28.2.1880.

- (26) 'Durch Terrorismus zur Freiheit', *FR*, 11.12.1880
- (27) モストの講演の予告に関しては cf. 'Vortrag von Brg. Most': 'Die Föderation der Gruppen und Communen', *FR*, 16.10.1880, p.4; 'Die Volkserziehung in der freien Gesellschaft', *FR*, 23.10.1880, p.4; 'Die geistigen Tätigkeiten in der freien Gesellschaft', *FR*, 30.10.1880, p.4; 'Die Entwicklung der gemeinsamen Consumtion in der freien Gesellschaft', *FR*, 6.11.1880, p.4; 'Die Stellung der Frau in der freien Gesellschaft', *FR*, 13.11.1880, p.4; 'Harmonie in der freien Gesellschaft', *FR*, 20.11.1880, p.4.
- (28) 'Weshalb wir uns Socialrevolutionaere nennen', *FR*, 27.11.1880; 'Durch Terrorismus zur Freiheit', *FR*, 9.12.1880。「自由社会」という語は、E・デューリングの著作『哲学教程』で用いられているが、彼の支持者であるモストは76年に同書を論評している。それゆえ「自由社会」という語がデューリングの著作から採用された可能性がある。ただし、彼は少なからぬ社会民主主義者によって支持された人物でもあるため、この語を用いたのがモストだけだったとは断定できない。Cf. E. Dühring, *Cursus der Philosophie*, Leipzig 1875 [HUL], pp.263-96; J. Most, 'Ein Philosoph', in: *Johann Most. Dokumente eines sozialdemokratischen Agitators*, Bd.3, ed. V. Szmula, Grafenau-Döffingen 1990, pp.139-46; D. Dowe/K. Tenfelde, 'Zur Rezeption Eugen Dührings in der deutschen Arbeiterbewegung in den 1870er Jahren', *Schriften aus dem Karl-Marx-Haus*, 24, Trier 1980, pp.25-58.
- (29) O. Quandt, *Die Anfänge der Bismarckschen Sozialgesetzgebung und die Haltung der Parteien (Das Unfallversicherungsgesetz 1881-1884)*, Berlin 1938, rpt. Vaduz 1965, p.33; H. J. Steinberg, 'Kommunismus', in: *GG*, Bd.3, Stuttgart 1982, p.506.
- (30) G. A. Ritter, *Sozialversicherung in Deutschland und England. Entstehung und Grundzüge im Vergleich*, München 1983, pp.23ff.; H. J. Steinberg, 'Sozialismus', in: *GG*, Bd.5, Stuttgart 1984, pp.984ff.; G. A. Ritter, *Der Sozialstaat. Entstehung und Entwicklung im internationalen Vergleich*, 2. Aufl., München 1991, pp.76ff.
- (31) 'Die Staatsgefahr', *FR*, 12.11.1881.
- (32) 'Foederation der Communen', *FR*, 19.11.1881
- (33) 'Nach dem Siege', *FR*, 18.3.1882.
- (34) 'Ein Blick aufs Ideal', *ibid.*
- (35) 'Freie Kommunen in der freien Gesellschaft', *FR*, 5.5.1883; 'Föderierte Kommune', *FR*, 12.5.1883.
- (36) 'Zeigt Eure Musterkarte!', *FR*, 1.2.1879.
- (37) 'Most's Rundreise in Amerika', *FR*, 23.12.1882.
- (38) []内はパンフレットでの頁数を意味する。'Der Anarchismus und seine Feinde' [pp.3-7], 'Des Pudels Kern' [pp.7-10], *FR*, 29.3.1884; 'Staatsgötzendienst' [pp.10-3], 'Nieder mit

Staat und Gesetz!' [pp.13-7], *FR*, 5.4.1884; 'Oekonomische Organisationen in der freien Gesellschaft' [pp.17-20], 'Unnötige Bedenken' [pp.20-4], *FR*, 12.4.1884; 'Konsumtion in der freien Gesellschaft' [pp.24-30], 'Gerechter Waarenaustausch' [pp.30-4], *FR*, 19.4.1884; 'Harmonischer Waarenaustausch' [pp.34-7], *FR*, 26.4.1884; 'Die Kopfarbeit in der freien Gesellschaft' [pp.37-9], 'Anarchistische Erziehungswesen' [pp.39-43], *FR*, 3.5.1884 'Die Frau in der freien Gesellschaft' [pp.43-51], *FR*,10.5.1884; 'Die Kommune in der freien Gesellschaft' [pp.51-4], 'Die Sozialisierung in der Anarchie' [pp.54-7], *FR*, 17.5.1884; 'Anarchie ist Harmonie' [pp.57-60], *FR*, 24.5.1884; 'Unsere Taktik' [pp.60-4], *FR*, 31.5.1884; 'Propaganda der Tat' [pp.64-7], "'Uebergangs"-Stadien' [pp.67-70], *FR*, 7.6.1884; 'Kurzer Prozess' [pp. 70-3], 'Des Pudels Kern' [pp.73-6], *FR*, 14.6.1884.

(39) 'Vogelscheuchen' [pp.77-82], *FR*, 21.6.1884; 'Ungelegte Eier' [pp.82-5], *FR*, 28.6.1884. 初版は全85頁。

(40) 'Majoritätsdusel' [pp.86-90]; 'Ehrgeiz und Herrschsucht' [pp.90-4], *FR*, 12.7.1884. 第2版は全94頁。

(41) 'Utopisterei und Realphilosophie' [pp.95-8], *FR*, 16.8.1884; 'Theorie und Praxis' [pp. 98-102], *FR*, 30.8.1884. 出版の告知に関しては cf. 'Notizen', *FR*, 12.7.1884; *FR*, 26.7.1884, p. 4; *FR*, 27.9.1884, p.4. 第3版は全102頁。

(42) H. Schlag, 'Literarisches', *FR*, 28.6.1884.

(43) Cf. F. Engels, *Die Bakunisten an der Arbeit. Denkschrift über den Aufstand in Spanien im Sommer 1873*, Leipzig 1873 [CMC] (*MEGA*, Bd.24, 1984, pp.323-39, 1013-27; *MEW*, Bd. 18, Berlin 1962, pp.467-93. 本書は、リープクネヒトが86年以降にアナーキズム批判の書として取り上げたという点でも重要である。本稿の註46で挙げた文献を参照。); H. Greulich, *Der Staat vom sozialdemokratischen Standpunkte aus. Eine Auseinandersetzung mit den "Anarchisten"*, Zürich 1877. [EB]. 以下の論文はイタリア語で発表されたため、ドイツ語圏における影響力は不明である。Cf. F. Engels, 'Dell' Autorità', *Almanacco Repubblicano per l'Anno 1874*, Lodi 1873, in : *MEGA*, Bd.24, Berlin 1984, pp.82-4 , pp.646-9 ('Von der Autorität', in: *MEW*, Bd. 18, Berlin 1962, pp.303-8; 'Über das Autoritätsprinzip': 'Ein Beitrag zur Geschichte der Internationale' [Übersetzt und eingeleitet von N. Rjasanoff], *Die Neue Zeit*, 32. Jg., Bd.1 (1913-14), pp.37-9.)

(44) Leo [E. Bernstein], 'Bemerkungen eines Sozialdemokraten ueber den Anarchismus', *SD*, 31.10., 7.11.1880; 'Sozialismus und Anarchismus', *SD*, 18.1.1883; 'Kommunismus oder Anarchie', *SD*, 15.11.1883. 80年9月、ラインスドルフによる最初のアナーキズムに関する論説が『フライハイト』に掲載された。ベルンシュタインは、この記事に触発されて80年の論説を書いたと筆者は推測する。Cf. A. B-n. [A. Reinsdorf], 'Einiges ueber Anarchismus', *FR*, 25.9.1880.

- (45) F. Engels, *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*, Zürich 1883, in: *MEGA*, Bd.27, Berlin 1988, p.620, .
- (46) Leo [E. Bernstein], ‘Der Sozialismus und der Staat’, *SD*, 20.12.1883. アナーキズムに対するドイツ社会主義労働者党の態度が初めて明確に示されたのは、87年10月に開催されたザンクト・ガレン党大会で採択された決議文においてであろう。同書の起草者はリープクネヒトだった。ただしここでは、社会主義社会を国家と呼ぶか否かは単なる用語上の問題に過ぎないとも述べられ、ユートピアによって両者の相違は説明されなかった。他方その前年頃に匿名で発行されたパンフレットにおいてリープクネヒトは、同様の主張を展開しながらも、経済の「集中化」によって実現される「社会主義的世界経済」を素描している。Cf. *Verhandlungen des Parteitags der deutschen Sozialdemokratie in St. Gallen. Abgehalten vom 2. bis 6. Oktober 1887*, Hottingen-Zürich 1888, rpt. in: *Protokolle der sozialdemokratischen Arbeiterpartei*, Bd.3, Glashütten im Taunus 1971, p.40; Vetter Niemand [W. Liebknecht], *Anarchismus; Sozialdemokratie und revolutionäre Taktik (Trutz-Eisenstern, 1)*, in: *Sozialdemokratische Bibliothek*, Bd.3, London 1890, rpt. Leipzig 1971, p.6.
- (47) MS. Most an Dave, 6.9.1884.
- (48) MS. Most an Dave, 19.9.1884.
- (49) H. Keil, ‘The German Immigrant Working Class of Chicago 1875-90’, in: *American Labor and Immigration History, 1877-1920s : Recent European research*, Urbana / Chicago / London 1983, p.165.
- (50) Grottkauに対するその後の批判に関しては cf. “‘Anarchismus oder Kommunismus?’”, *FR*, 12.7.1884; ‘Kritikkastereien’, *FR*, 26.7.1884.
- (51) 『リバティー』にタッカーの見解が全面的に反映されていたわけではない。同紙の支持者や寄稿者たちは、しばしば「ボストン派」と呼ばれているが、実際にはアメリカ各地に在住していた人々であり、タッカーとともに同紙の論調を形作っていた[9, p.241ff.]。
- (52) B. R. Tucker, *Staatssozialismus und Anarchismus: in wie weit sie übereinstimmen und worin sie sich unterscheiden*, Berlin 1895, pp.6-12.
- (53) [B. R. Tucker] ‘On Picket Duty’, *LBY*, 17.5.1884. Cf. ‘Der Anarchismus und seine Feinde’, *FR*, 29.3.1884.
- (54) X. [H. Appleton], ‘Anarchism, True and False’, *LBY*, 6.9.1884. 本稿は、‘X.’の署名記事をH. Appletonのものとする通説に依拠している[9, p.224 fn. 87, p.245 fn. 41]。
- (55) ‘Die Freie Formation der Gruppen’, *FR*, 28.2.1885
- (56) X. [H. Appleton], ‘Reform Machinists’, *LBY*, 25.4.1885.
- (57) ‘Ueber den Staat’, *FR*, 7.3.1885.
- (58) ‘Individual-Phantasten’, *FR*, 9.5.1885.

- (59) X. [H. Appleton], “Individualist Visionaries”, *LBY*, 20.6.1885.
- (60) ‘Notizen’, *FR*, 4.7.1885.
- (61) ‘On Picket Duty’, *LBY*, 25.4.1885; ‘On Picket Duty’, *LBY*, 23.5.1885.
- (62) ‘Der individuelle Arbeitsertrag’, *FR*, 20.6.1885.
- (63) タイトル部分に掲げられていたのは創刊号から80年8月28日号までである。その後、83年8月11日から85年6月27日までの各号では、4つの異なるスローガンが各ページの欄外最上段に掲げられていた（当時『フライト』は全4頁）。
- (64) ‘Organisation und Verwaltung beim Communismus’, *FR*, 28.2.1880; ‘Was wollt Ihr denn?’, *FR*, 26.6.1880. ネットラウは、モストが「共産主義」という語を用いたのはドイツの読者に「集産主義」という語がなじみがなかったからだとしている[15, p.214]。ただしモストは78年に「集産主義」を使用している[10, p.39]。
- (65) ‘Mouvement social’, *RVT*, 22.6.1884. 『レヴォルテ』の副題はこの少し以前から「共産主義的アナーキストの機関紙」となった。
- (66) 26.7.1884, *FR*, p.4; ‘Mouvement social’, *RVT*, 17.8/ 30 8.1884; *RVT*, 28.9./ 11.10.1884, p.4
- (67) MS. Most an Peukert, 25.6.1884. これ以前からモストは、ポイケルトと自身が理論上で異なる見解を持つことに気づき始めていた。ただしこの時に彼は、ポイケルトの未来社会論を、完全に組織が欠如した社会だと特徴づけているだけであった。Cf. MS. Most an Peukert, 24.5.1884.
- (68) MS. Most an Peukert, 20.7.1884.
- (69) MS. Most an Dave, 10.8.1884.
- (70) MS. Most an Dave, 6.9.1884.
- (71) *Ibid.*
- (72) 以下の批判に関しては全て cf. ‘Ueber die “Freie Gesellschaft”, London, 19. Juli 1884’, *FR*, 6.9.1884. 同じ記事をリンケは協会の許可なく『レヴォルテ』編集部に送った[15, p.329]。Cf. ‘Angleterre’, *RVT*, 31.8/ 13.9.1884; ‘Extrait du compte-rendu de la séance du 12 juillet 1884’, *RVT*, 14.9/ 27.9.1884. この時にダーヴらは、ドイツ人による運動の内部対立という問題を、フランス語圏の新聞『レヴォルテ』で表沙汰にしたという理由でリンケを責め、これもまた、協会内部の対立の原因となったと思われる[20, p.237]。
- (73) 以下のモストの反論に関しては cf. ‘Ueber die “Freie Gesellschaft”, London, 19. Juli 1884’; ‘Anm. d. Red.’, *FR*, 6.9.1884.
- (74) J. H., ‘(Eingesandt.) Johann Most in West-Belleville’, *FR*, 24.5.1884.
- (75) [J. Most] ‘Die Arbeitsmänner’, in: *Most’s Proletarier = Liederbuch. In fünfter Auflage, zusammengestellt und hrsg. von Gustav Geildhof in Chemnitz, Chemnitz 1875* [CMC],

pp.24ff. (‘Die Arbeitsmänner’, in: J. Most, *Sechs Proletarier-Lieder, gewidmet den Arbeitern Oesterreichs*, 2. verbesserte Aufl., Chemnitz n.d. [ca. 1872] [HUL], p.8); V. Lidtke, *The Alternative Culture. Socialist Labor in Imperial Germany*, New York / Oxford 1985, pp.104, 116.

(76) H. Keil / H. Ickstadt, ‘Elemente einer deutschen Arbeiterkultur in Chicago zwischen 1880 und 1890’, *Geschichte und Gesellschaft*, 1979, pp.114ff.

(77) G. A. Schilling, ‘History of Labor Movement in Chicago’, in: *Life of Albert Parsons*, Chicago 1903, pp.xxii

(78) ‘Schlaraffia’, *FR*, 20.6.1885.

(79) MS. Most an Peukert, 25.6.1884 .

(80) ‘Die Logik der Tatsachen’, *FR*, 20.6.1885.

(81) J. Most, *Die Lösung der socialen Frage. Ein Vortrag, gehalten vor Berliner Arbeitern*, Berlin 1876 [CMC], p.38.

(82) こういった主張は『反デューリング論』からの影響であった可能性もある。

(83) これは社会民主主義者W. Hasencleverによる議会での発言からの引用である。Cf. ‘Von Nah und Fern’, *FR*, 3.5.1884; *Stenographische Berichte über die Verhandlungen des Reichstages*, 5. Legislaturperiode, 4. Session, 1. Bd., 9. Sitzung, 20.3.1884, p.138.

(84) ‘Literatur-Konfusionen’, *FR*, 20.9.1884.

(85) Cf. J. Most, *Revolutionäre Kriegswissenschaft. Ein Handbüchlein zur Anleitung betreffend Gebrauches und Herstellung von Nitro-Glycerin, Dynamit, Schießbaumwolle, Knallquecksilber, Bomben, Brändsätsen, Giften, u.s.w. , u.s.w.* [New York 1885]. [EB]

(86) ‘Revolutionäre Kriegstaktik’, *FR*, 9.1.1886.

(87) ‘Die Aufgaben der Gewerkschaften’, *FR*, 26.7.1884.

(88) Cf. ‘Der Anarchismus. Aus dem Franzoesischen von Peter Krapotkin [sic], I’, *FR*, 7.1.1888.

(89) ‘Repräsentativ = Regierungen und Arbeitslohn (Aus einer Abhandlung von P. Kropotkin ueber das Lohnsystem)’, *FR*, 24.5.1890; ‘Das collectivistische Lohn = System’, *FR*, 31.5.1890; ‘Ungleiche Entlohnung’, *FR*, 7.6.1890; ‘Gleiche Loehne gegen freien Communismus’, *FR*, 14.6.1890.

(90) J. Most, ‘Die “Freiheit”’, *FR*, 4.7.1896.

(91) ‘Zur Organisationsfrage’, *FR*, 6.6.1885.

(92) 89年12月に出版されたパンフレットにおいてモストは、既存の階級支配をあらゆる手段で破壊すること、および協同組合的生産組織に基づく自由社会を創設することにおいて一致すれば、社会民主主義者とアナーキストは共闘可能だと主張している。Cf. [J. Most] ‘Die Stellung der

Anarchisten gegenüber anderen Arbeiter=Parteien', *FR*, 30.11.1889; J. Most, *Der kommunistische Anarchismus. Internationale Bibliothek No.14*, New York 1889, rpt. Berlin 1921 [TUEL], p.23.

(たなか ひかる 一橋大学大学院社会学研究科特別研修生)

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 40*

発行所 東京都国立市中 2 - 1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1998年 3月31日

印刷所 岐阜市三輪プリントピア 3

株式会社コムラ

